投入口

作フェシアバイツルア

人蠻（イキイヂ）

譯英野佐

版出社上至

1925

大正
14. 11. 7
内交

544-167

序

「蠻人」(原名「ヂイキイ」――一九一七年作)はアルツイバアシエフの露西亞農民觀であると觀ることが出來る。

彼の鋭い眼に映じた露西亞農民は必ずしも、あの淳朴な、お人よしな人間ではなく、そしてまた、當時多くの文學者達によつて讃美された「神を懷ける民族」乃至は「神を求める民族」でもなかつた。彼は、彼等のそうした反面に潜む惡魔的野獸性に對して、より鋭い凝視を向けたのである。そして、それと同時に彼は、彼等農民生活を支配してゐる底知れない無智、迷信を指摘した。

オルギンの「露西亞農民氣質」は、アルツイバアシエフのそうした觀察を裏付けるものである。彼は言ふ——

『彼等農民の生活は慘酷なものである。從つて彼等は慘酷に慣れてゐる。暗澹たる秋の夜、空は黑くかき曇り、風は號泣し、冷かな雨が靜かに降り注ぐ時、狼と馬盜人の仕事が始まる。飢に苦しむ剽悍なる狼は小舍の中の羊や牛を襲擊する。馬盜人はそれ程空腹を感じてゐないけれ共一層奸智邪惡である。而して意氣地の無いのに附け込んで大仕掛の强奪を敢行するのである。全村は是等の馬盜人の爲めに始終恐怖の中にある。彼等は抵抗するものを殺戮し其の家を燒うちすることを辭せない。遂に村民が盜人の一人を捉へた場合には無論死刑に處する。處刑の慘酷なことは膽を冷すばかりである。

公でない私の關係に於ても、慘酷と云ふことは、百姓の全生涯を通じて、いちぢるしく目に附く。父は小兒を叩いて人事不省に陷らせ、夫は妻を毆打し、時には頭髮を手に卷きつけて、床や庭を引ずり廻しながら片手でなぐる。村長は、村民が規則を守らないと云つて誰でも毆ぐる。「鼻をなぐるぞ」「横腹を蹴破るぞ」「目をうんとたたくぞ」と云ふ樣な言葉は、最も普通に村で云ふ言葉である。』

本篇の「蠻人」の中で、長兄のキリイムが白痴の三男ピョオテニカの不行跡を思

ひ切つてこらしめるあたり、妻の醜行を知つたときの彼の狂憤、裸體で傷いてゐる罪の女を間に置いて、長兄と次男との格鬪——それは正に野獸の本性そのまゝである。

「哀れな荒廢した、彼等の慘酷な生活の歸結として、當然酒を飲む樣になる。百姓は殆んど何等の期待なくして酒を飲む。飲酒、泥酔、續いて來る悔恨は百姓の悲慘を增し、慘虐と憎惡の心を深からしめるばかりである。」

とオルギンは言つてゐる。

十九世紀終末當時に於ける露西亞農民の生活は、暴虐極まる專制政治の壓迫の下に慘憺たるものであつた。

無辜な同胞の不幸な運命に對して、感受性の鋭敏な露西亞のインテリゲンチヤは男々しくも立つて、その救濟敎化の事業に赴いた。「民衆の中へ！」とは實に當時の青年男女のモットオであつた。彼等が自己の使命に對する態度は眞劍であり

熱烈でもあつた。しかし、彼等のそうした純眞な熱情も、一度、現實の固い障壁に打つかつたときに、現實曝露の悲哀を經驗せざるを得なかつた。農民は彼等の美くしい理想に對して、餘りに無智であり、無理解であつた。そこには何等の融合點さへなかつたのである。

それに就てオルギンは次の樣に云つてゐる。

「當時既に經濟上の基礎は、原始的自然狀態から近代的個人產業に變化してゐつたとは云へ、一般農民の思考の習性、敎化の程度は、なほ實質的に農奴の束縛の下にのこされ、原始人そのままの有樣であつた。一八七八年にそうであつたが其後十年、二十年、三十年を經過しても依然としてその狀態には變りがない。廣い世界からかけ離れてゐる露西亞農民が、他のものと何等共通點を持つてゐないと云つても、それに不思議はない筈だ。彼等にとつては紳士とは、町の衣裝を著た人間で、手工でなしに生活して行く「奇妙な奴」「奇體な鳥」としか寫らなかつた。

農民に對する愛が强く、又困窮に對して、善く順應すると共に、進んで之れを享けるとしたところで、露西亞のムヂイクが極めて原始的な程度の文化に甘じてゐる間は、近代人は彼等と親しく言葉を

交すことは出來ない。智識階級の中で最も優秀な人々、深き愛と誠實とを有する男女でさへも、ムジイクに了解されることは出來ない。」

最後にオルギンは言つてゐる。

「彼等がその壓迫の爲めに到底生きて行かれないかしらと思はれる程の重い負擔を課せられながらもなほ努力を繼續して行きつゝあるのは、神が之れを課するものであると云ふ「眞面目」な信仰を持つてゐるからであらう！」

しかし、彼等の、そうした忍從性こそ、アルツイバアシエフに殘された疑問ではなかつたであらうか？

本編「蠻人」の末尾に於て、辯護士ドウホウエツキイは、萬事に理性の發達した、あれ程の聰明さを持ちながらも、陪審官になつた老いた商人の「矛盾」した審判の底に潜む「神秘」な心裡を解することは出來なかつた。彼は、彼の理性を以て解くことの出來ない、ある不愉快な陰影を心に殘したまゝ村を去るのであつた。

勿論「蠻人」の價値は、作者の農民觀だけに盡きるものではない。我々は本書に據つても、作者の創作を色づける他の著しい特色に接することが出來ると思ふ。

＊　＊　＊

アルツイバアシエフは革命前、ロシヤに於ける代表的現代都市作家として獨特の地位を保つてゐたのである。彼は驚くべき物語りの天才を有し、特に悲劇に對する鋭き洞察眼は、彼の作の殆んど全部に渡つて、不思議なる魅力を與へるものとなつて現れてゐる。彼は病氣や、肉體凋落の必然の結果現はれる、死の恐怖から脱する爲め、彼は人間自身の中に保有されたる、熾烈にして、かつ審美なるセックスの中に、生活現象の本質を見出さんとした。

アルツイバアシエフは性の發作を、最も赤裸な態度で表現した最初の作家として有名であると云はれてゐる。その性的描寫は餘りに微細に渉り、藝術的眞理性の見地からは寧ろ、不必要であり、同時に、それは女性に對して尊敬を缺いてゐ

る、との非難さへある。實に粗野な形に於て現はれた、彼の性的生活の描寫にこそ、彼が創作を色づける特色があるのである。

しかし、そうした粗野な性的描寫だけが彼の作家としての內容の全部をなすものではない。彼は同時に亦他の諸感情の動きに對して、熱心に觀察する綿密なる人生の觀照家である。

批評家リポフ・ロカチエフスキイの言葉を藉りて言ふなれば、

「アルツイバアシエフは自然に對して鋭き凝視を向ける。彼の自然描寫は、書齋に於てペンを用ひるのではなく、浩天の下に畫筆を用ひて畫き出された、それである。それはもはや、人間の感情のプリズムを透して見たる自然の姿ではなく、それは、既に自然そのものに融合せんとあへぎつつある藝術である——。然しながら、彼が一度、自然描寫から人間への描寫に轉ずるとき、彼は、殆んど、技巧的な困難と、悲哀と、失望とのどうすることも出來ない感情に打勝つことが出來なかつた。そこに彼が人生の畫を、ナイフでかき破る惱しさがあり、死を畫き出すことになる——陰鬱で重い調子、ほの暗い光り、黑色の文箱、黑色の墓、黑色の洞穴、黑色の惡夢、黑色の砂漠　黑色の人間、——そうし

た總ては、太陽や、月や、星の光を追ふてゐる。黒色はやがて金色の色彩にかはり、やさしく、太陽の光線の中に、打ちまじる。人間最大の觀樂はやがて肉體への崇拜となる。」

更に、アルツイバアシエフの個人主義的人生觀は、ニイチエや、スチルネルのそれの如く、學研的ではないが、そのかはり、粗朴にして、荒削りな、生きた人生觀は、前者に比して一層の深刻味があると云はれてゐる。そして、そこには、西洋作家の誰のものよりも、殆んど類のない程多分に、東洋的思想を含んでゐると云はれてゐる。

大正十四年八月十五日　　三田四國町にて

譯者

（附記）本書は始め「獸性」と題してすでに發行せんとする際、不幸發賣禁止の厄に逢つた。其後內務當局と數回折衝の結果、或る部分の削除を以て、漸く本書を發行し得るに至つたことを記しておく。（十月九日　發行者）

蠻人

アルツィバアシェフ作

佐野　英譯

一

商人ヂイキイの邸宅は、廣大な空地の廣場の中に建てられてあつた。廣場には、毎年そこで馬市が立つので、その附近の地面一體は、枯草の塵と腐れかけた馬糞とで蔽はれてゐた。人々はこの廣場を『セノオイ』の廣場と呼んでゐた。

廣場には、錆び果てた下水で、年中乾いたことのない壕と、半潰れの堤があつた。遠く傳說の源を探つてみると、その堤は昔のカザックの要塞の殘墟で、壕を開鑿する際など人間の骸骨が多數現はれたと云ふことである。實に野良犬が堤の上を彼方此方に驅づり廻り、絶えずそれが人間の骨かとさへ思はれる、なにか黄

色を帯びた、骨の様なものを運びながら、仲間同志でいがみ合つたりしてゐた。

廣場の周圍には、押し潰したやうなちつぽけな家が不性に建ち並んでゐた。そしてその家のどれもにが、灰色の木の垣根と、埃まみれの貧弱な庭——そこには只小さい酢つぱい果實しか實らない林檎の木が生えてゐるだけだつた——とがあつた。廣場の一方は曲りくねつた薄汚ない小川に臨んで傾斜し、その流れに沿ふてすげの木の茂みが續いてゐた。橋の袂に近く、古ぼけて黒ずんだ鍛冶屋がある、屋根は青草の伸びるに任せてあつた。夕方になると、水蒸氣と石炭の煤煙が、川から立ち昇つた。開けつぱなしにされた鍛冶屋の戸口からは、妙に光を見せる赤い火が漏れ、そして合槌の調子よい音が遠くまで響いた。廣場の他の一方は、町の公園との境をなしてゐた。それは平坦なほこりつぽい町の一角を飾る唯一の青い木蔭であつた。そしてそこでは祭日ごとに軍樂隊の催しがあつた。

畑地に通ずる長い、眞直ぐのクラビセンスク街道（邦語に譯せば墓地街道と云ふ意）は、ヂイキイ

家の眞正面から初つてゐた。その通りをしばしば死人が運ばれた。そんなときは墓場に設けた鐘が、その震えるやうな哀調を遠方にまで漂はすのであつた。

高い垣と、がつしりした土藏とで取り圍まれた、大きく、殺風景なヂイキイ家は、この寂寥とした廣場にはいかにも相應しいものに見受けられた。土藏の軒下には、丸太の木がそこら中に取り散らされてゐて、威勢よく生え伸びた雜草がその上にのしかぶさつてゐた。母屋は廣場に面した赤い煉瓦の一階建で、築石は高く、そしてこれ迄一度も開け放されたことのない窓が取付けられてあつた。庭から母屋にかけて、格好のよくない硝子張りのベランダが設けられてゐて、そこは冬になれば寒く、夏はペエチカの中のやうに蒸し暑かつた。ベランダの向側には一本の大きな塵まみれの柳の木があるだけで、他には目星しい何にものもない貧弱で無益な庭があつた。

この邸を見た誰もが、一目見て、直ちに、其處には澁面の氣むづかし屋が住つ

て居ること、そして彼等は假令一錢の金でも執拗に握り込み、脂つぼい食物を喰ひ、鼾をかいて眠り、曾て笑つたことなどなく、醉つぱらつたときや、ひどく怒つた場合には、全くの野蠻人その儘の、恐ろしくて、猛惡な人間であることに氣付くだらう。この家族の姓までが、『ヂイキイ』（蠻人）と呼ばれてゐることは、意味のあることである。

老ヂイキイが死んだのは、よほど久しい以前のことである。彼には三人の息子が殘されてあつた。――長男のキリイム・イワアノウキッチは、太つた頑盲な、そして活動的に出來た男で、それは死んだ父親そつくりであつた。次男のザアハルは、丈の高い白つぽい髪の毛を持つた、腕力の勝れた男であつた。三男のピョオテニカは、生れながらの白痴で、脂肪質のでつぷり肥つた、低い額と、小さな被るそうな眼をもつた男で、唾れが垂れそうな厚い唇をしてゐた。

たとへ、キリイム・イワアノウキッチがなほ父親の存命中から家事萬端を一身

に引き受け、その一切を切廻して來たとは云へ、家庭内に於ては老未亡人が引きつづいて采配を振るつてゐた。未亡人アンナ・ペトロウナは嚴格な舊敎信者で、常に黑布の肩掛けを外ずしたことはなく、專心家庭の幸福を守つてゐた。町中の人で彼女を知つてゐるものは皆恐れと尊敬とを懷いてをり、ただに息子達からばかりでなく、働き人夫達や、その近所の人達の誰からも『おつかさん』と呼ばれてゐた。

キリイム・イワアノウキッチは曾つて妻帶したこともあつたが、彼には子供はなかつた。

ザアハルの性質は概して家庭向きと云ふ方ではなかつた。獨身の彼は、到るところで大膽に町家のすばしこい娘達と關係してゐた。白痴のピョオテニカは、色慾にかけては完全な動物的本能性の持主で、それは實に彼獨得の强烈なものであつた。彼は片つ端しから町家の娘と云はず、日傭女、野良の仕事に働いてゐる女、

それからヂイキイ家の所屬の製油所に雇はれてゐる女の尻までも追ひ廻した。彼は頗る醜い上に、しかも、もの一言話すでもなく、ただ唸るだけであつたが、彼の毒牙から脱れることの出來る女は、それ等の思慮に乏しい無智な女達の範圍では幾人とはなかつた。彼はそうした女達を、五十錢銀貨やビスケット、又は金の十字架で他愛もなく巧みに釣つた。美しい娘が菜園畑にでも姿を見せると、彼は何時何處から遣つて來たともなくそこに姿をヒョッコリ現はすのである。そして何か唸りながら彼女に近づいてゆき、女の手や懷中に、ビスケットやドロップスなどを捻ぢ込むのである。……

……

……

……

……。

……。すると其處には自分の友達の女が居るのである。彼女のどす黑い日に燻けた胸には、すでに小鳩型や、或は赤いリボンのついた金の十字架が誇らしげに輝いてゐた。彼女達のことを人々は『ピョオテニカの名づけ娘』と呼んでゐた。

キリイム・イワアノウキッチは、こうしたふしだらが我慢出來なかつた。で若し、そうした仕打を見付けでもすると、娘達を棒をもつて追拂ひ、その足でピョオテニカをあらゆる侮蔑をもつて、彼からそうした慾望を、永久に叩き落すために、ひどく威嚇しつけた。

或る日、娘が姙娠したといふ言ひ草をもつて、市場の商人であるその娘の母親が、ヂイキイ家に苦情を持ち込んで來た。キリイム・イワアノウキッチは、默つてその老婆に十ルウブルを支拂つた。その夜、彼は姿を隱してゐた白痴を捕へ、ピョオテニカがその場に打倒れて、殆んど冷くなる迄叩きのめした。そこに居合

はせた皆の者が、彼に水を浴せかけた。がキリイム・イワアノウキッチは、階段の上に突つ立つて痙攣して拳を握りしめ、思切つて罵つた。

『かまうことはない――棄てて置け！』

白痴は子供の頃から長兄をひどく恐れてゐた。しかもこの出來事以來、彼は暗い、猛獸的な憎惡の心を、イワアノウキッチに向けるやうになつた。とは云へ、彼にとつては如何とも施す術のなかつたといふことは、いふ迄もないことであつた。

しかし、キリイム・イワアノウキッチが外に出て、邸内の仕事を見繕いでもしてゐる場合、白痴は、ブリヤン草の中の何處かに姿を潜めて、丁度それは猛獸使に注ぐ猛獸のやうな眸差で、幾時間ともなく熱心に、執拗く、長兄の姿を目をもつてつけ纏ふのであつた。

しかしこうした彼も、異つた一面をもつてゐた。ピヨオテニカは次兄のザアハ

ルに對しては、單に彼を愛してゐるばかりでなく、寧ろ崇拜さへもしてゐた。ザアハルは、決して彼を虐めるようなことはしなかつたばかりでなく、時々彼に、小遣錢や、菓子を與へ、その上、時には獵にも一緒に連れて出ることもあつた。で白痴は、鐵砲の筒先から射ち出された爆音に對して、またとない興味を抱いてゐた。そして、射落された鳥が翔ひ上る力を失つて、草叢の中にでも這入り込んだ時など、白痴は、餌物に對した野獸のそれのやうに眼を光らし、獸の如き素迅さをもつて獲物を引つ捕へ、黄色な齒をむき出して、獲物の頸のあたりを嚙み破るのである。その時の彼は、牡猫のやうに唸り、そしてその凄い形相は見るからに慄つとさせた。

キリイム・イワアノウキッチは、商賣と會計の一切を管理し、ザアハルは時々暫らくの間、曠野に建てられてある農舍(別宅)に寢泊りして、農場と、彼の計畫になつた製油場を監督してゐた。家政は、アンナ・ペテロウナが一人で切り盛り

してゐた。

白痴のピョオテニカは、附近の娘達に惡戯したり、大飯を喰つたりする外何一つ働く譯でもなかつた。

母親と長兄は彼をば、父親のヂイキイが、傲慢で、常に凡ゆる場處で、自分自身を第一人者の人間と信じてゐた罪で、神樣が自分達の家庭にその代償として授けた天罰であると、眞面目に確く信じてゐた。

二

キリイム・イワアノウキツチは、ザアハルとピョオテニカより、ずつと遙かな年長者であつた。彼は、始めて四十五歳の時になつて妻帶した。それ迄といふものは、彼は常に、そうした馬鹿氣たことは考へてみたことさへもないと言つてゐた、がしかし、或時彼は僅かの用向きで、隣り町に出掛けたことがあつた。其處で彼は、ある破産者の娘で、彼の未來の妻、グラヒラを見染めてからは、急に、暗い重苦しい氣持に襲はれるやうになり、遂に彼女を戀するやうになつてしまつた。それ以後と云ふもの彼は哀愁に襲はれ、色が黑くなるまでに熱く惚れ込んで

しまつた。

グラヒラは、何方かと云へば、脊は餘り高くはないが、しかし、全體からは調和のとれた女だつた。肉付きのいゝ肩、細いしつかりした手、廣くて濃いはつきりした眉、華奢で清淨な唇、白く整調して、濕つた齒が、彼女の微笑する際覗き見へ、接する人の心を浮き立たせるのであつた。それは恰も、眞夏の炎天の下に曝されてゐたものが、冷い清水に接したときの樣に、人の心に接吻の慾望を覺えさすのに十分の魅力あるものであつた。一言にして云へば、彼女は聰明な風貌を持つた、なかなかの美人であつた。

キリイム・イワアノウキッチが、妻に向けて抱いてゐた愛慾は、抑制することの出來ない、動物的劣情を示す全くの肉慾的衝動から來るものであつた。

グラヒラは、女として何等の非の打ちどころもなかつた。それに對して、キリイム・イワアノウキッチは、鐵のやりに强力な健康體の所有者であり、精力家で

あるに拘はらず、この結婚をする最終の時までといふもの、彼は童貞を續けて來たのであつた。

ディキイ家が檀家になつてゐる、中央敎會の祭司長が、この緣組のことに就いて說明したところによると、『極端な禁慾生活の忍耐が今ここに、凡て終りを告げたに外ならない』ものであつた。

勿論、大低の場合、ポケットを脹ました、ばん廣の薄汚い脊廣服を着けて、何時も步き廻る不格好なキリイム・イワアノウキッチが、一齊に彼女に目をつけてゐた若い官吏や士官連に伍し、活潑で、そしてあでやかなグラヒラに、何んで好かれる筈はなかつた。しかし求婚者としての彼には、他にもつと有利な關係があつた。從つて彼の申出は、寧ろ喜んで容れられた。云ふ迄もなくグラヒラ自身は、反對に、强情を張つて首肯しなかつたが、それでも父親が承知せず、折檻を加へて迄も無理强いした。で彼女も一時の苦しい破目から脫れる爲に、遂に不性無性

父親の意に降服してしまつたのである。

婚禮の式は、新婦の兩親の住まつてゐる町で擧げられた。式場にヂイキイの母親がわざわざ立ち會つたのは、ただ、黑い房のついた重い褐色の天鵞絨の衣裝を着飾りたいためからであつた。ザアハルはこの時、狩獵に出てかかつた風邪のため寢込んでゐた。ピヨオテニカは、他人樣の前で恥さらしになると云ふので、出席させられなかつた。けれども、本人の白痴はたまらなく結婚式の場所に出て見たかつたのであつた、といふのは、ただ儀式の際にきまつて放射される大砲の音響に、どう云ふ譯ともなく非常な興味を抱いてゐたからであつた。彼が家に殘されることを知つたとき、彼は喚いて床の上にのたうち廻つた。これ以後といふもの、白痴は一層長兄を怨み、自分を侮辱した唯一の責任者であるとした。

結婚式には、音樂や、ロシヤ式シャンパン、大きな香（譯者註、ロシヤの田舍の習慣として大きな香は、盛大な結婚式を語るもので、入費の程度で香の大小が區別された。）が燒かれて、申し分のない盛大なものであつた。グラヒラ

は繻子の白衣裝に、長い打掛けを被り、キリイム・イワアノウキッチは黑い新調の燕尾服に、純白のネクタイをつけてゐた。

老いた馬喰の家は、その日は明く輝き渡つた。音樂は絕間なく響き流れ、數多の窓には舞踊の無我境にある群がちらちらした。窓外の通りは見物人で一杯に滿ち溢れ、見物人達がガヤガヤと聲高く、花嫁や花婿や、客のことを批評し合つた。

グラヒラは、踊つて踊つて、どうやら不自然であるとさえ思へる程活潑に踊りぬいた。そして聲高く笑いこけたり、氣取つたりした。しかしその間にも折にふれ、恐怖をもつて自分の夫となるべき男に目を走らせた。この色黑の、年のいつた男が自分の夫であるとは、どうしても信じられなかつた。そしてそのことは、努めて考へまいとした。しかし時は流れ過ぎて、……時刻が容捨なく押迫つて來る、時が迫れば逆る程、彼女の心の中の恐怖と本質的な寂しさとは、益々强さを加へてつのつていつた。そうしたことから、彼

女の手は氷のやうに冷たくなり、膝は力抜けするのを覺へるのであつた。

……。しかし兎も角もその翌日になつて、土地の習慣から、新郎新婦が馬車に乘つて町中を廻り歩いたときに、微笑したり、お辭儀をしたりしてゐるグラヒラの樣子は、如何にも落ちつき拂つて、幸福さうにさえ見えた。がしかし、そこには既に、以前の彼女の求められた處女の快活さではなくて、金滿家の夫人、乃至は二流どころの商人の女房としての輕快さと、威嚴とがあつた。

三日間に亙つて續いた酒宴が濟むと、新夫婦は夫の實家に引揚げることになつた。馬喰の老人は今日が今日までも娘を、達者な馬以上には考へてはゐなかつた。が、いよいよお別れといふ時になると、流石に眼を雲らせた。グラヒラの母親——小柄で、永久に何時も狼狽してゐる——は恰も自分の娘を、墓にでも送る

かのやうであつた。

恐らく、老婆の嘆きには無理からぬところがあつたに違ひない。と云ふのは、粗暴で、氣むづかしいキリイム・イワアノウヰッチの顏、それから、まるで無表情な、聖像畫にでもありそうな姑の容貌を見るにつけても、娘の未來は淋しい、屹度、喜びのないものであると云ふことを察するに充分なものであつたからである。

グラヒラは、夫と姑に伴はれて、ヂイキイ家のある町に向つて、クラビシエンスク街道を馬車で驅けてゐた。折も折、偶々どこかの葬式で、噎び泣くやうな弔の鐘が響き聞へてゐた。併し土地の迷信として葬式に逢遇することは吉緣の前兆にされてゐたので、このことはグラヒラの氣持に大した影響は與へなかつたが、先づ第一彼女をして不愉快を覺えさしたのは、殺風景な「セノオイ」の空地と、邊鄙な田舍町の有樣を見たときであり、視野の達する限り靑い何一つ見當るもの

もなく、塵埃でたまらなく汚ない市場に泌み込んでゐる、鹽魚、タアル、皮類、油、石油等の臭氣で息の詰りそうな、その田舍町を見たときである。しかし彼女はピヨオテニカの異樣な姿に目を觸れ、彼の唸るのを聞いたとき、胸が冷たくなつたかと思はれる程吃驚した。

初對面に出たザアハルは、恐らく嫂が彼等の家庭の外觀から、如何なる印象を受けたであらうかと想像したに違いなかつた。なぜと云ふに、彼は彼女に對して特別の愛嬌を振りかけてみせ、初對面の後、彼は元氣な口調で次のやうなことを言つた。『ねえ、嫂さん、心配する程でもありませんよ。この家にだつて、そう不愉快な事ばかりがある譯でもないんですから。』

三

しかし眞實に言へば、この家には樂しみと云ふものは全然なかつた。

『私達の生活が、世間の人達のに比べて、殊更に惡いと云ふ譯はない』と云つたアンナ・ペテロウナの自慢は、あながち事實と大して懸け離れたものではなかつた。蓋しこの町全體の住民の生活は、ヂイキイ家の生活と別に擇ぶところがなかつたからである。

町と云つても、それは名ばかりの全くの田舍町で、縣廳の所在地の都會に百五十露里、一ばん近い停車場に三十露里も距つてゐた。町には官吏や、商人、それ

から一般下級の町人達が居住し、又騎兵聯隊も駐頓してゐた。郡立學校を初め、中學校、女學校、更に官衙、集會場、ポルチエスク、カムスキイ銀行の支店、ウキノグラアド氏經營の蒸氣製粉所、監獄、それにいくつかの教會堂があり、中央教會堂には、靈驗あらたかな聖母の像が納められてあつた。

町の中央の市場には、賣店――いづれも細長い低い建物で、屋根は青く塗つた鐵葺――が軒を並べて連つてゐて、建物の内部は夥しい數に仕切られ、底暗いまるで穴藏のやうな小店が出來て、そこで更紗、皮類、石油、馬具、釘、鎌、火藥、散彈、釦、その他いろいろの小間物を販賣してゐた。市場の中央に當つて高く拔ん出てゐる、木柱に大きな屋根を覆せた古い建物があつた。この建物には『ショボイ（お尻？）』といふ特に變つた名稱が付けられてあつた。多少でも行儀を知る町家の娘達が口にすることを躊躇するやうな名稱のものであつた。この建物の軒下には、雜貨屋に便利な木造の倉庫が建てられてゐた。

町には倶樂部が作られてゐて、そこには餘り惡くない圖書館が設けてあつた。娘達や中學生又は役人達の遊び場所になつてゐる運動場があり、そして圓い廣間や夏季食堂の備へられた公園があつた。倶樂部内では、夜、舞踊會や、素人演劇會等が常に催されたが、それはただ若い青年達の喜びの機會になつただけのことで、老人連は寧ろ、カルタや酒食の方を擇んだ。そこで圖書館の書物を利用でもするのは、若い女達か、若くは若い猶太人だけに限つてゐた。

この町を天地に、結婚もあれば、出産もあり、死もあつた。商人は商賣に、役人は役に働き、一般の下級町人は、それぞれ樣々の小仕事に職を求めてゐた。少くとも一瞥したところそれらの人達には、それぞれ獨立した固有の生活――他人とはまるで關係のない――があるやうに思はれる。が併し眞實のところは、かうした彼等の凡ては、町の周圍に散在する廣い田園、勾配地、林、だだつ廣い沼地を控へてゐる大小幾多の村々、それらを相手に生活を營むでゐるもので、決して

彼等自身獨立的な生活の關係にあるのではない。

さて、これらの大小多くの村落に生活してゐる住民の狀態を見ると、奇體な半野蠻人性を多分に持ち合せてをり、迷信深くて、いづれも示し合せたやうにもぢやもぢやの髯をたくわへ、夏から冬に打通した厚い、そして汚れて黑づんだ、まるで土で慥へた樣な帽子を被り歩いてゐる。これ卽ち、謂ふところの百姓（ムヂイク）なので、幾多の華かな都會で、多くの人々が彼等百姓の救濟方法に就いて、書物を書いたり議論し合つたりしてゐる。彼等百姓を呼ぶのに『神を懷いた住民』といふ言葉を使ひ、彼等の中には何かしら彼等特有の、偉大な、そして神聖な眞理の含まれてゐることを想像して、彼等に就いては大いに學ぶべきものがあると主張し、凡べての政治團體が、この『ムヂイク』なる言葉の旗下に組織され、それが起因をなして大事件は惹き起され、しかも獻身的の智識階級の若者達は、敢て殺戮、苦役、絞首臺の犧牲にまでなることを何れも覺悟した。

然るに、都會に於てはかうした議論に捉はれてゐる一方、彼等百姓は灼熱の陽にやかれ、酷寒の中に凍えながらもなほ、信じ難い敏捷さで、壞れかけた鍬を振り廻し、冷汗を絞りながら、力の根限り、僅かに殘された砂や、石のやうに硬い赤土の地面を敲き、林を切り開き、沼を垣める仕事を繼續しつゝある。しかもその上にも尙、負擔し切れない過重の稅金を徵收されるのである。

生活の全部を失ひ、次から次に町に向つて流れ込む彼等は、全くの野蠻人の如く、魂は枯れ、そして臆病な人間に變り、正帽やつばの廣い帽子を被つた凡ての人達に對しては、極端にまで屈從的になり、馬鹿叮嚀に頭を下げ、帽子も被らず身體を野天にさらしては、せめてもの救濟を賴りに官廳の門前に佇み續けるのであつた。

定期市場の開かれる當日など、馬を曳いてゐるもの、車を引張つてゐるもの、妻子を連れ、犬を連れたものの夥しい集團が、町に向けて入り込むので、通りと

云ふ通りはそれらの群集で一杯に塞がり、車の軌る音、馬の嘶き、小兒等の泣き叫ぶ聲、醉つぱらいの喚き散らす聲、破廉恥極まる掠奪等、雜踏混亂の極みである。空地に散在した彼等は棒を立て、穴だらけの天幕を張る。そのために町は丁度、韃靼人かチンギスカンの野蠻人の侵入當時その儘の光景を思出させるのであつた。

しかし町の住民達の多くは、彼等の必要の爲めに、又彼等に依つて存在を保つてゐるのである。市場は彼等の必要に迫られて設けられたもので、官廳は、彼等の保護取締りから設置されてゐるのである。敎會も、白色の四階建の監獄も亦、彼等に對してこそ必要なのである。

商人は彼等を詐り、町人は彼等を瞞し、坊主は彼の遣口で、恐しい地獄の話しに彼等の膽を潰すようなことのみを擇んだ。將校や兵卒は、土地と自由とに關する勅令について、飢餓と無智な殺伐な暴に根を下して勃發する無自覺にして野卑

な彼等百姓の動亂を鎭壓するのが、彼等の日常の仕事であつた。

都會の青年達は、或る時期の年齢に達すると、勉强の手を打切り、老人連の後を引き次いで新しい盜賊に、或は掠奪階級の位置に座り込むし、若い娘達は、公金費消者の許に平氣で嫁ぎ、青年は學位稱の授與されるのを待つて、各々がそれぞれに相當する正服を着けて役人になると云ふ順序である。そこにはただ、永久に繰り返される新陳代謝があるだけで、不變的進步の法則を、忠實に遵守してゐるに過ぎないやうに思はれる。

町の全住民！　彼等は欺瞞と、掠奪とを目的の全部として生活してゐるのである。よし理性に富み、鋭い良心の閃きを持つ生氣ある人間であつても、そこに一度這入り込んだが最後、その瞬間を最終に、彼は一般にそこの町の人達に根强く喰ひ入つてゐる食慾と怠惰の影響にすつかり浸み染つて、その精神は忽ち鈍重に衰へてしまふ。金錢、攝食、睡眠、カルタ、無駄話し、僞善、宴會等のそうした

一切の生活、それは互に爭鬪と殺戮を生む都會民そのものの生活であ

ヂイキイ家の人達の生活も、亦等しくこうした都會生活のおたぶんに洩れたものではなかつた。

彼の廣い構への大きい邸宅の内では、勘定や量りでいつも誰かを誤魔化してゐた。この家に遣つてきて内部に這内つた百姓が、暫く經つてから度を失つたやうな目付で、いかにも訝しさに堪まらないと云ふ風で、汗ばんだ顔に異樣な表情を浮べて、邸内から飛び出して來るようなことは何時ものことで、さして珍らしいことではなかつた。

『全體何うしたことだらう』と彼はそこで一人つぶやいた後、地上に靜かに視線を投げると、何か考へ拔こうとする彼は舌打ちして居酒屋へと這入つて行くのである。

しかしヂイキイ家に於ては、家庭としては別に不自由を感ずることはなかつた。利益を手占めすることだけが努力で、その餘は食つては眠る無難な家庭として通してゐた。

キリイム・イワアノウヰッチは、全身が汗ばんで、息詰るやうな思ひで終日を打通して掛引の仕事に沒頭し、怒つたり、神に誓を立てるのがその日の生活で、母親のアンナは又、彼女で默つてはゐなかつた。下女を叱る時などは金切聲をふり絞るのであつた。ザアハルは製油所で働いてゐた。

晩食とお茶どきだけに、皆が一處に集つて顔を合はし、そして彼等は各々に怠慢や浪費のことについて非難の言葉を交へ、そして利益や損害の同一の話題が繰り返され續けられるだけであつた。馬鹿氣切つた冗談や、粗暴極まる動作、虫のいゝ祈禱、命名日と婚姻、不愉快な葬式、氣を腐らすやうな酒宴、殆んどが氣拔けして仕舞ひそうな教會のお勤めの安息日が、せめてもの彼等にとつての無上の

象晴しとなる日にされてゐた。

グラヒラはやがてこうした人々の生活の中に混つて、それも凡ての生活に馴れては來た。そして一面彼女の生活は如何にも幸福であるとさへ、或は考へることが出來たのかも知れなかつた。尠くとも彼女が扮装して夫と擦れ擦れに肩を並べて教會に出掛けてゆくときや、又は菓子果物を出して客を饗應する場合など、彼女の美しい輝いた顔には、安靜とも見へる落付きが浮んでゐた。

結婚して二ヶ年は過ぎ去つた。彼女は著しく目立つまでに肥つて來た。そして動作は如何にも輕快さを加へ、言葉の調子は益々流暢になつて來た。その一體の變化を綜合して云ふなら、彼女は一層以前の彼女よりも優美になつて來たのだつた。がどう云ふ譯かこれまでそうであつたやうに、彼女に會つてその魅惑的な微笑に接したとき、直ちに接吻せずにはゐられない氣持を起させる或ものが今は既に失はれてゐた。

グラヒラが夫に對して懷いてゐた恐怖心は、今も尙變りはなかつた。しかし今は尠くも夫の氣むづかしい、疲れ果てた抱擁に對して彼女は、腹一杯に食ひ詰めた牛のやうに、無性に無關心に受けながすことに馴れて來た。

キリイム・イワノウキッチは、殆んど彼女に對して特殊な注意を向けると云ふことは全然なかつた。そして只自己の、飽くことのない慾望の力に驅られ、その頑丈な精力の溢れた體軀をもつて、夜毎に、彼女の肉體のうへに迫るばかりであつた。

母親のペテロウナは嫁に對して憎しみを抱き、何かにつけて當り散らした。殊にある日、馬喰の親爺がボロボロの姿で金の無心に來てからと云ふものは、一層嫁を虐待した。その親爺は汚なく、うすぼけてベロベロに醉つぱらい、野卑にオドオドしてゐた。誰も親爺には惠まなかつた。しかも彼等は、乞食の家から來た嫁だと云ふ口實の下にさんざんグラヒラをいぢめた。

『大事な、お父つさんの樣子は大方見なかつたらうよ！　親爺さんの家に居た頃は、ボロボロの着物を引擦つてゐた癖に、この家に來てからはどうだ、まるでお姫樣だ！』

ザアハルはグラヒラには親切で、殊更に同情を寄せ、そしてしばしば彼女を母親の虐待の鞭の中から、また彼女の美しい姿に目をつけて犬のやうに付纏ふ白痴のピヨオテニカの手から、彼女を救つた。

しかしザアハルは家に留つてゐる場合は滅多になく、大低は農舍の方に行つてゐるか、さもなければ獵か散歩に出るのが常であつた。ピヨオテニカはいつも唸つてゐるばかりだつたが、二年目の終らうとする頃から、夫のあるグラヒラを密かに戀ひ慕ふやうになつた。最初の裡は彼自身にも不明確なもので、彼の氣を焦立てるに足る程のものではなかつたが、その初期の必然的な時機を過ぎて、彼の感情は變化を現はして來た。

ここに一つの出來事が發生した、と云ふのは、ザアハルが搾油機の鑢旋にかかつて跳ね飛ばされたために、頭をひどく負傷したのであつた。傷は餘り大きいものではなかつた、がどう云ふ譯か膿をもち出して、それで傷口は毎日洗淨したうへに繃帶する必要があつた。グラヒラがその仕事を引受けてやることになつたのである。

ザアハルは椅子に腰を下し、若い婦人はその側に立ち添ふて、水の這入つた小皿に綿を浸し、傷口を濕しながらガアゼの糸の一本一本を注意深く專念に取り除いてゐた。

手術はかなりの痛みを覺えさすものであつた。それでもザアハルは、ぢつと我慢を續け、少しも痛くないと云ふ風な表情で、笑つたり、冗談をさへ言つたりした。

『家の姉さんは、素敵な手際ですね！　きつとお醫者さんになつたらよかつた

と思ひますよ。』

グラヒラは滿足な氣持に顏を赫らめ、更に一層うまくやらうと努めた。

かくて或る時のこと、それはいかにも偶然のことであつたが、彼女はザアハルの頭を自分の温かくて柔かい、彈力のある胸の邊に壓しつけた。接觸はほんの瞬間であつたが、グラヒラは本能的に體をはつとして引こめた。しかし何故か二人は同じように等しく心が急に搔亂されてゐた。夕闇が訪れる迄、グラヒラは沈默して、呆然としてゐた。でもザアハルは、恰も今初めて彼女を熟視するかのやうに、ときどき若い婦人の姿に目を向けた。暫くして彼等は辛うじて我に還ることが出來た。が彼等はこの思ひがけない接觸で、初めてお互に——彼は女を、彼女は男を——その心の深奥に觸れて、それを發見したものであつたか否かは疑はしいものであつた。

この夕べ以來、ザアハルは不思議に、殊に、男性と云ふ意識の中から、彼女の

麗はしい肩や、張り出した胸、しなやかな躰つき、赤い唇に目を留めるようになつた。グラヒラは又義弟のみなぎるやうな温情を心に想ひ煩ふた。毎日の繃帶卷きの機會が、いやが上にも彼等を益々內部的に接近せしめ、そして二人は同じ一つのことを心に待ち望んでゐた。卽ちザアハルはグラヒラの體が觸れるのを切に欲求するし、しかも彼女は、ややもすれば彼の頭を自分の胸に壓し付けようとする氣持になつてくるのを、辛うじて危く支へ得てゐた。遂に斯くして、殆んど彼等の意志を突き退けて裏切る行爲に出るやうなこともあつて、その場合に二人は想像の及ばない甘い、恍惚の境に我を忘れて浸つた。

ザアハルは身動き一つしないで椅子に腰掛けてゐた。しかしグラヒラは內部から燃え立つ焰の熱氣で上氣したやうになり、まるで夢心地で半ば目を閉ざし、傷口に綿をあててゐた。水はザアハルの髮の毛を傳つて襟下に流れたが、二人共そんなことには全く氣付かないで續けてゐた。暫くの後に、丁度夢の世界から脫れ

て來たかのやうに、驚きと不安な氣持になつて二人は相方に立ち退いた。

一週間經過すると、傷口はすつかり癒つたので、繃帶の必要はなくなつた。それまで與へられてゐた機會は斷たれた、で、自然彼等の關係も從前の常軌に迄復した。しかし、それは表面にそうした狀態に見えるだけのことに過ぎなかつた。

ザアハルはこのことの以前から、美しいグラヒラの嬌態がひどく氣に入つてゐた。けれ共曾つて一度も、女に對する注意をもつて彼女に目を向けて見やうなどとは、夢にも思つてゐなかつた。グラヒラは、彼にとつては實兄の妻としての關係であり、それに彼女について卑劣な考へを持つといふことは、全くとんでもない罪惡のやうに心で解譯をしてゐたのだつた。あの繃帶のことから、そのとき經驗した不可思議な心胸の動搖を、彼は努めて忘れ果てようと試みた。でこの試みは効を奏したらしくみへた。彼はその後再び町家の娘達の尻を追ひ廻すようになり、田園の方の農舍に出掛けたり、從前に變りもなく自分の製油所の仕事にいそ

しんだ。製油所は、家から餘り遠くないクラッドビセンスク街道の荒地の中に建られてあつた。

一方グラヒラは、明かに、彼女の生活に多少の深刻味を加へてきた。彼女はこのことのあつてから後は、ザアハルとの關係に就いて、普通以上の交渉を求め出した。若し彼が長いこと姿を見せないようなことがあると、彼女はいつも非常な淋しさを感じ、色々な口實を設けては毎日のようにでも製油所にまで驅けつけるのであつた。製油所はザアハルの一人舞臺の世界で、そこでは彼はよく農奴のやうに熱心に働いた。あるときは、木製の圓盤を廻轉さすために馬を操り、また或る時には、水壓機の把手を執つて勞働者の助勢もやり、そのほか絶えず冗談を云つては笑つたりしてゐた。彼の襯衣は胸の釦が外され、袖は肘のあたりまでまくし上げられてゐた。グラヒラは、人目に立たない樣にして、凝乎と彼の陽に燒けた、嚴丈な筋肉の凡ての部分の動きを熱した眼で見守つた。そのときの彼女の眼

は曇り、頬は上氣から赤味を帶びてくるのであつた。

『どうしたの！　嫂さん――、お手傳にでも來たんですか？』と云つてザアハルは、からかい半分に尋ねたりした。グラヒラは顏を赦らめながら笑つて、そして出て行くのであつた。で、夜になつて、……『……』と云つては夫をどぎまぎさせるのであつた。

或る不明瞭な氣持が、彼女の內部に働いてゐた。それが嫉妬であるとはつきり知るまでは、彼女自身にもそれが何故であるか何うしても解らなかつたのであつた。

あるとき彼女は、ザアハルが、製油所に働いてゐる娘の一人に戲れてゐるのを見た。その娘は別嬪で、健康で、傲慢さうな娘であつた。娘はザアハルの胸の邊りをついて、ニッと齒を見せて微笑した。それは、いかにも誘惑的な表情で、心

をそそる挑發的なものでさへあつた。

『おゝ、可愛いいね。』こう云ひながらザアハルは目をしばたゝいた。娘もすぐと笑ひ添へた。それを見たグラヒラは、默つて脊を返して歩み去つた。そしてその日は終日彼女は、ザアハルが冗談を云ふのにも返事さへしなかつた。

この日の事があつてから彼女は初めて、自分がザアハルを戀してゐると云ふ確かな事實を知ることが出來た。そしてそれからと云ふものは、彼に對して抱く心が、彼女をして凡ての女に嫉妬をもつて見るやうにしてしまつたのであつた。ザアハルが客に招かれてゆく（それは大底娘のゐる家に決つてゐた）と、グラヒラは落ち付いてゐることなどは、到底出來ることではなかつた。そして彼も何れ結婚するものと思ひ浮べてみるとき、彼女は何うすることも出來ない惱ましさを覺えた。それと同時に、彼女には、自分はザアハルの知つてゐる限りの女の中で、一番美しくて、優越してゐる者だと云ふことを、彼に見せつけてやりたい强い望

みがあつた。で彼女は彼の面前で、態と自分の長い波のやうな黒髪を解き亂したり、又は襯衣一枚で彼の目にとまらせようと努めてみたり、更にそれは愚劣であつたが、……。こうした考へを思ひ返したとき、彼女の顏は頰照り、心は烈しい羞恥で失神するまでに一杯にされるのであつた。しかし彼女の肥滿し切つた肉體は、困惑した暗い慾求に惱まされ、太つた足は、淡い心の刺戟にむづむづした。

この世で例令何を代償にしても、彼女は何人に對してもこの自分の尊い心を他に與へまいと强く決心してゐた。何故なら、彼女はあらゆる男達を罪に穢れた人間としてゐたからであつた。ザアハルのお蔭で殊に心の惱みを覺え出したとき、グラヒラは彼のことを、夫の愛によつて意識の裡から葬らうと努めた。しかしその心の努力によつて經驗することは、ただ疲勞と、憂愁な苦悶と、夫キリイム・イワアノウキッチに對して抱く嫌惡の心の外には何ものも得られなかつた。

四

或る夜、ヂイキイ家から三軒程距つたところに火事が起つた。火事は商人ソロドニマフの木屑を入れた物置場から始つたのであつた。

氣味惡い暗黑な夜空は、赤い、搖亂する火の天光で明くなり、そして近傍の鐘樓は上から下まで、バラ色に照し出された。火事場の上空高く、紫色の煙の濛々と渦卷く中に、赤い火の子は飛び散つた。町中の敎會から亂打される警鐘の音響が、物凄く天地の中に震へ渡つた。ヂイキイ家の邸内からは、消防夫達のどよめきや、斷續して發する水管の爆音、犬の吠え立てる聲、相呼應する驚愕に滿ちた

叫び聲などが手にとるやうに聞きとれた。時々燃へさかつた火柱が、耳を突ん裂くやうな音を立てて倒れると同時に、無數の火花を振り散らして、暗黑の空に壯快に立ち昇つた。邸内は晝のやうに明るく、そして時々燃へながら落ちて來る火の子がとんで來た。全部の勞働者は、それにキリイム・イワアノウキッチ自身までも、バケッを手にして、土藏の屋根の上に押し登つて、落ちて來る數多の火の子に水をそそぎかけた。

玄關先に突立つて、身動きもしない母親の姿が見えた。全身は闇の大氣に包まれ、ただ火事の明りで蒼白く照し出された顏と、痩せて骨ばつた手とが浮び出てゐた。

火事の夜に、人々は往々にして苦痛な氣持と、また反對に、或る何か知ら愉快な氣持とを同時に經驗することがある。それは、近接した周圍の凡てが變化を遂げて、異常な美しさを以て轉換された、新しい觀念の中に生起してくるところの

或る事實が發生しつゝあるといふ、そのことであるやうに思はれる。

グラヒラは既に眠りに入らうとしてゐた。とそのとき、『火事だ！　火事だ！』と叫び喚く聲が起つたのを、彼女は朧げな耳朶の近くに聞いた。

彼女は大きな肩掛けを、手早に引掛けると玄關の方に驅け出した。

その邊の夜の大氣は、息詰るやうな厭な温かさで、そして火事が近いために堪らなく熱くなつて來た。彼女は母親のすぐ後に立つて、火煙の燃えさかる音や、人々の叫び合ふ異樣な聲を不安そうに聞いてゐた。幾つもの警鐘が彼方此方から鳴り響くと、火事は益々火勢を加へてゆくように思はれた。赤く燒けた火事の明りに照し出された屋根に、キリイム・イワアノウキッチと他の勞働者達の黑い影が、手に取るようにはつきりと見られた。彼等は相方から互に示し合ひながら、落下してくる火の子を消し止めるために、絶えず蹲んだ。屋根の一方が明く輝いてゐるので、土藏の軒は反對に一層暗く見えた。そしてその暗闇の中では、犬の

鎖のガチヤガチヤ鳴る音が聞へた。

グラヒラは素肌の肩を肩掛に包んで立つてゐた。火事の明りを受けて、それは曾つて見られなかつた目新らしい、特別な美くしさを見せてゐた。

ザアハルは、黒い煙に包まれた火事場の方に、遠てゝ驅けつけて來たが、家族達の安否が氣遣はれるので勢つけて引返して來た。彼はそこでふとグラヒラを發見して吃驚した。

『おや、おや——』と彼は快活に叫んで、『どうです、よく燃えるぢやありませんか！　驚いたでせう、嫂さん？』

グラヒラは彼の言葉には返事をしなかつた。そして前と同じ樣に火焰を瞠つてゐた。彼女の黒い眼の中には輝いた小さな火花が反映してゐた。

ザアハルは火事の形勢を見るために玄關口に上り、グラヒラと並らんで立つた。

『何でそんなに吃驚してるんです？』ザアハルは繰り返して云つた。

グラヒラは默つた儘、下から上の方に視線を運んで、眞面に彼の顏を瞶めた。この沈默の眸差の中には、何かある意味深い働きが含まれてゐた。でザアハルはそれをみると思はず惱ましさを覺えた。

『どうして貴方は私に對して、そのように——』彼の聲は顫えてゐた。しかしグラヒラは不意に脊を向け返すと、靜かに暗い廊下の方へ歩み去つた。

ザノハルは玄關口に佇んでゐたが、突然、火事のことも、母親のことも、それからこの世の中の一切のことも忘れ果ててしまつた。思ひ設けぬもの、狂はしい想念が腦裡を衝き、旋風のやうに彼の意識全部を瞬く間に押し包んでしまつた。曾つて、彼にとつて恐ろしいことに思はれてゐたことが、今、突然手近に、そして可能の形を示して來た。この一切——夜、火事、猛火の爆音、警鐘、闇と明るみ、——は餘りに異常なものとしての實在であつた。こうした夜には、凡ての企

てられた意志が實行を促して、しかも何者の恐れをも持たなくなるのである。

彼は、母親が嚴しく、そして、さとすやうに言ひかけたとき、なほそれをまだ躊躇してゐた。

『ボンヤリしてゐる場合ぢやない、お祭りぢやないんだよ！　早くランプに灯を點けたらいいに――。グラアシャ!!　グラアシェンカ!!』

グラヒラは答へなかつた。彼女は廊下の闇の中に立つてゐた。そこからは、火事の明りに熱し出されてゐるザアハルの姿も見えれば、姑の呼んでゐる聲も聞きとれてはゐたが、何故とも知れぬある淋しい感情に、すつかり思ひ耽つてゐたので、返事する程の氣持に餘裕はなかつたのであつた。彼女の内部に働いてゐる不思議な氣持、それはグラヒラの解待してゐたものであるが、彼女自身それが何であるかは知り得なかつた。それで若しこの瞬間、ザアハルが彼女を呼ぶかでもするならば、彼女は恥も怖れもなく、無我無中に、自分の凡てを投げ出して了つた

かもしれない。それで若し、誰かがそのときの彼女の行動を制しようとでもするならば、グラヒラは彼を殺してまでも、結局最後の行く處迄行かずにはゐなかつたらう。

『グラアシャ！』と姑は呼んだ、『一體あれは、あすこで何してゐるんだらう……聾にでもなつたのかい。ザアハル、お前行つて、あれにランプに灯を點けるように話してお呉れ。』

ザアハルは向きをかへて眞直ぐに暗闇の中に這入り込んでいつた。彼の足は痺れた。彼はグラヒラがどこに居るかを知らなかつた。しかし、息詰るやうな家の闇の中に這入ると、すぐ彼は、彼女がどこかすぐその近くに、しかも自分を待つてゐるやうな氣がしてならなかつた。

グラヒラは明りの差しこんだ戸口の蔭になつてゐる處に立つて、ザアハルが自分の方に向つて眞面に近づいて來るのを見てゐた。そして彼女は、その場處から

動かうとはしなかつた。で彼がなほ五歩とも歩かない中に、彼女とピッタリ打突つかつた。彼はそれがグラヒラであることは、よく知りぬいてゐたが、何故かそれでも低い聲で、しかも度を失つたやうに驚きの聲を立てた。

『誰！』

グラヒラはそれでもまだ默つて、身動きもしなかつた。……

……

……

……

……

……。ただ彼女の乾いた、火のやうな息の觸感が、彼の頸と頰のあたりに振りかかつただけだつた。ザアハルは、彼女が自分に……したのか、どうか全く解らなかつたであつたらう。佇んでゐた彼は僅かの間動かなかつたが、やがて歩を變へて靜かに玄關口の方へ立ち去つていつた。彼の足は顫へ、額の邊は

すつかり濕つてゐた。

玄關先で、彼はキリイム・イワアノウキッチに出會つた。彼は重々しく階段を昇り、そして腹立たしげに云つた。

『付け火に決つてゐらあ！　仕方のない奴等だ！』

屋外はすでに大半元の暗さに返り、鐘の音響も絶え、バラ色だつた鐘樓も灰色に變り、黑くなつた土藏の蔭では、なほ大勢のガヤガヤ聲がしてゐる。火花はもうすでに飛び散つて來なかつた。土藏の屋根に上つてゐた勞働者達も不用になつたので、一人降り二人降りして、呑氣らしく聲高に騷ぎながら、暗い闇の中に消へていつた。

キリイム・イワアノウキッチは、ザアハルを見ると、多少いまいましそうに云つた。

『イワアヌイチ、大した損害なんだ！　燒け殘つた品だつて、殆んど全部が駄

目なんだ。』

ザアハルは沈默を續けた。兄の姿とその聲が、重苦しい、臆病な羞恥を潜ましてゐる彼の心に、或る壓迫をもつて迫つた。彼はふと、自分で遂げようとしてゐた行動を知ると、急に堪らなく戰慄した。この氣持は、彼が眞蒼になつた程鋭く激しいものであつた。彼は遽てゝ階段を下り、家から少し離れた、暗い、廣い庭の平地に突つ立つた。

『そうだつた！　そうだつた！』

彼は、頭が非常に混亂してくるのを感じた。そして、なほ指先から全身に亘つて、ある温かくて、柔かい、滑かな感覺がまだ殘つてゐた。

彼は遠くからキリイム・イワアノウキッチが、グラヒラを怒鳴りつけてゐる聲を聞いて、思はず身を顫はした。そして兄に對して、或る憎惡の心を覺えた。

火事は全く終熄して、附近は恰も林の中の闇のやうに暗くなつた。ただベランダの硝子に、赤色の反映が殘つてゐるだけであつた。窓には薄明りが見えたので家にはランプが點されたのだらう。ザアハルは土藏の暗い蔭に立つて、家の方に眼を向けてゐた。けれども彼は、さて何うした處置に出てよいかその判斷がつかなかつた。

……それは、既に危機一髪のところで、殆んど取返しのつかない恐ろしい罪を犯すところであつた、といふことを彼は今漸くはつきりと意識した。しかもこの意識とは反對に、……。そしてそれが彼には、今となつてはどうだつていいやうに思はれた。どうせ晩かれ早かれ、必然的にぶつかるべき運命として——。燃えるやうな羞恥と共に、感覺的の遺憾なさが湧き、それは盲目的な憎惡と變つて、グラヒラに向けられた。

ザアハルは、朝になるまで庭内を歩き廻つてゐたが、廣場に出てしまつた。丁度曉の弱い光りが反映して、廣場は殊更に空寞さを示してゐた。彼は帽子も被ら

ず、長い間堤の上に佇んで、次第に明くなるにつれて靜かに姿を現はして來る町の家々を眺め入つてゐた。

彼が眠る爲めに寢床に横たはつた頃は、黑い屋根の輪廓と鐘樓の蔭には、幅廣い曉の線光が擴りかけて、クラドビシチエンスク街道には、市場に急ぐ女の群が壺や籠を持つて、歩いてゐた。

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

既に、ザアハルにとつても同樣であつたやうに、彼女にも、それは脫かれることの出來ないものであり、その爲にそれと鬪ふことが全く無益であると云ふことが、何故にか明瞭に意識されてゐた。

五

その翌日、キリイム・イワアノウキッチはいつになく、一寸も外出しなかつた。そして店の勘定の調べに一日中家に留つてゐた。これを見たとき、グラヒラは、恰も氣抜けでもした者のやうであつた。ある心の秘密が彼女を捉へた瞬間、彼女は茫然とした。

『神様！　私と云ふ人間は一體どうしたことなんでございませう？』彼女は殆んど絶望をもつて思ひに沈むのであつた。

戸外はあたかも眞夏の炎天で、家々の屋根は、太陽の直射を受けて、目を向けることの出來ない程ぎらつき、青黑い空は茫莫としてゐた。牝鷄は垣根の下の日蔭で、羽を逆立つて圓くなり、鎖に結へられた犬は、巢箱の傍に長く寢そべり、長く赤い舌を垂れて、苦しげに息づいてゐた。塵まみれのブリアン草は、炎熱に葉を縮ませてゐた。「セノオイ」の廣場は、まるで全く枯渴し盡し、見渡す限り陽炎の波が燻つて居り、そして反對側の白い屋根の並びは、陽光が白熱して、見るからに氣持惡かつた。

キリイム・イワアノウキッチは汗ばんだ體を眞赤にして、胴着一枚で椅子に腰を下し、やつと濕つた指先で算盤を握り計算を續けてゐた。母親の居る氣配もなく、家の中は死のやうな靜けさに返り、たゞ無數の黑蠅がうるさく飛び廻るので、それ丈けが僅かに家の中の靜寂を壞してゐた。

ザアハルは朝から自分の部屋に閉ぢ籠つてゐた。彼の部屋はベランダに面したこの家の中では、最も涼しい場所であつた。彼はグラヒラの姿に目を觸れなかつ

た、亦彼女が何處に居るかさへ知らなかつた。しかし二人の心を結合する或る内部の交渉は失はれてはゐなかつた。ザアハルは仕事に掛らうとしたが、グラヒラが家の中の何處かに居るといふことを感じると、何うしても仕事には手がつかなかつた。そして彼の全心はそのことでそそり立てられた。深い惱みに襲はれながら、たゞ彼女のことのみ思ひ煩ふた。

彼の擧動は一見、平常と變りはないかの如くであつたが、心の中は盗人のそれのやうに僞つてゐるものであり、しかも家庭内の働き人達は、彼が何を考へ込んでゐるか、何を求めてゐるか、亦、何を期待してゐるかをよく知つてゐた。

キリイム・イワアノウキッチが家に居る間はグラヒラとしては、どう苦心しても、ザアハルの許に忍び寄る方法は到底出來なかつた筈であつた。そのことはザアハルを益々失望せしめた。

グラヒラは又、彼女で熱病患者のやうに苦み惱んだ。彼女は心の均衡を失つて

寢室から臺所へ、臺所から玄關先へ、家中をうろつき歩いた。そして彼女は、苦悶に充ちた眼を持つて、時々青空を見上げたり、干からびた廣い庭を見渡したりした。はては家事の手傳に加はり、下女と話し合つたりしてもみた。けれども彼女の頭の中から一瞬も離れることのない、變りない同一の考へ、――ザアハルのことと、そして彼が自分をきつと待つてゐるに違いないと云ふこと、ただこのことのみに心を奪はれ、何一つ落ち着いて手にはつかなかつた。

何故に、彼女はザアハルの許に行かねばならないのか、それはグラヒラ自身にも解らなかつた。が、その無明の力は不可避的の運命として、彼女自身よりも強いものであつた。

グラヒラは氣を紛らすために、次から次に仕事を思ひ出した。けれども悉く失敗に終つてしまつた。で、彼女は全く絶望に陷つたとき、姑の處へ行つて、糸を買ひに町に出ることを願つた。

『お待ち、午後になつたら私も一緒に行くから』と、姑は云ふのであつた。

遂に彼女は、運命の前に脆いてしまつた。

彼女は廊下に脱け出ると、そこで算盤の音を耳にしながら、なほも音を忍ばす爲めにスカアトの裾をからげ、鼠のやうにザアハルの部屋にそつと這入り込んだ。

寢室の側を行き過ぎるときに、彼女は夫の肩先を見、しかもキリイム・イワアノウキツチがチラと自分を見たやうにさへ思つた。がそれは彼女の行動を思ひ止まらせるには足らなかつた。

ザアハルは卓子の脇に腰掛けてゐたが、グラヒラの姿を見たときに座を立たうともせず、無言で何とも言葉をかけなかつた。ただ彼はそのとき一寸の間顔を赫めただけであつた。グラヒラはほんの僅かの間、戸の一方の端の處に身をすりつけて佇み、肩越しに頭を後に振向けると、鋭く聞き耳を立てた。聽て戸口を離

れ、緩やかにまるで力抜けたやうに腕をぐつたりと垂れ、ザアハルの側に歩み寄つた。彼女は伏目になつて、そして彼の正面に大膽に立つた。……

（以下十九行削除）

六

その後ヂイキイ家は、一瞥したところでは別に變化もなく、凡ては從前通りの外觀を保つてゐた。キリイム・イワアノウキッチが家計萬端を切廻してゐることと、母親アンナが、神棚に燈明を點けたり、小言を依然つづけることと、白痴が娘達の尻を追廻はしてゐること、勞働、食事、罵詈、貯蓄と、一切は從前通りであつた。

しかし、少くともそれが永久に賦與されたところの運命と思はれるやうな、この平凡な生活の中に、……。

一旦グラヒラが……。彼女はめつきり美

しさを加へ、そして爛熟して來た。何故か彼女は、急に浮々として娼婦的な表情を見せてきた。無邪氣な態度はなくなつて、眼は絶えず輝き、唇は血塊のやうに赤く變つた。ザアハルと同じくグラヒラも、或る一つの事實に終始氣を奪はれ、ほんの僅かの機會を捉へては、戀人の許に走り寄つた。物置きの中、土藏の蔭、菜園畑等は、彼等の密會の場所となつてゐた。それ等の場所に於て彼等は、勞働者やキリイム・イワアノウキッチ自身にさへ、危く發見されやうとしたこともあつた。そして、彼等を救ふ本當に幸福な機會と云ふのはほんの數回に過ぎなかつた。グラヒラの意中は常に恐怖にかられてゐた。…………………

……………………………………………………

……………………………………………………。

グラヒラは、キリイム・イワアノウキッチの妻として、從前に變るものではなかつた。實際彼女としても、それ以外であり得るとは夢にだも思はなかつた。…

……………………………………………………

……………………………………………………

……………………………………………………

……………………………………………………

……………………………………………………

……………………………………………………

……………………………………………………。

變姿祭（八月六日）の當日、キリイム・イワアノウキッチは、重要な關係にある得意先の商人の一人を招待した。祭日には一般に晴衣を着飾る習慣があつたのでグラヒラも綠色の絹の衣服を着た。とそれがまた黑味勝ちの眼と、黑い髮をした彼女に非常によく似合つた。御馳走は運ばれた。各々の嗜好物や、それからその場に適當した會話が交はされて、それは整然として寧ろ儀式的に行はれた。ウオ

ツカ三瓶と赤い教會酒二瓶が飲み干された頃、キリイム・イアワノウキッチと、痩せた髯を剃り込んだ、そして長裾の黒いフロックを着た客の老人は眞赤に醉拂らい、すつかり陽氣になつてしまつた。老人は美しいグラヒラが非常に氣に入つたやうで、少さな油切つた目で彼女を眺め、キリイム・イワアノウキッチに目くばせしながら云つた。

『フウン、なる程――な！　女としちや先づ申し分なしか?!』

グラヒラはカッと顏色を變へ、そして澄し込んで下をうつ向いた。母親はお役目的に不平を口にしながら言葉をを挾んだ。

『そんなこと云つて、あれが赤面するぢやありませんか、いつになつても氣の若い親爺さんね！。』

老人は一本しかない黒くて汚い齒をむき出して笑ひこけた。そして言返した。

『おかあさん、誤魔化したつてだめだ。俺にしろお前さんにしろ若けえ時分に

や、好いこともあつたあね――。』

食事が終つた後で、皆は客を見送つて室内から出た。キリイム・イワアノウキッチとザアハルは、敬意を表して客を馬車の處まで案内した。グラヒラと母親は玄關先に立ち、絹の肩掛を垂らし、腰の邊で手を組んでゐた。

別れの挨拶が濟んで、老人は自分の馬車に昇り、手綱を取るとグラヒラを見遣り、もう一度キリイム・イワノアウキッチに目くばせして、

『他山の石と云ふ譯か！』と云つて笑ひ出した。そしてその肥つた商人向きの馬を驅け出さした。

『お氣嫌よう！』

跳の若者が輕快に老人の後に飛び上り、勢ついた馬車は跳込みを打ちながら開かれた廣い門を曲つた。老人はすぐに腰を下して綿帽子を深く被つた。その骨ばつた頑丈な肩を見るにつけて、彼がほんの今先まで、冗談云つたり笑ひこけたり

してゐたその老人とはどう見ても思ひよらなかつた。老人の脊を兩手で抱いてゐる若者の素足の足先が、ぶら下つてゐた。皆は客を送り出してしまうと部屋に戻つた。

『まあ！　いい鹽梅にいつた。』老人との取引が思ふ壺に入つたことを思ひながら母親は云つた。が、キリイム・イワアノウキッチの考へは違つたところにあつた。彼は老人の冗談で赤くなつて、ひどく亢奮してゐる妻の側を歩きながら、からかい半分に指でグラヒラの胸をつつき、同じように彼女に目配せした。

『まあ！　うるさいわね！』とグラヒラは吐き出すやうに云つて、癇癪を起して荒々しく次の部屋に飛び込んだ。

『怒りだしたよ』とキリイム・イワアノウキッチはからかつた。そして弟に向つて強いて高慢らしい口調で云つた。

『だが、俺の嗅もどうだ。まんざらでもないな、え？』

ザーハルは態と目ばたきして默りこんでゐた。そのとき彼は次のやうなことを考へた。『……

……。』しかし兄の云つたことが一つの暗示のやうにも思はれて、彼は惱ましかつた。

ザアハルの期待は實現しなかつた。と云ふのは、母とグラヒラとはご馳走の殘りものを戸棚の中に取りしまひ始めた。ザアハルが窓際に座つて廣場を眺めてゐた頃、兄はぢれつたさうに聲を顫はし、大聲に、寢室からグラヒラを呼んだ。

『グラセンカ！』

……

……一瞥をザアハルに投げた。

この瞬間の彼女の一瞥の中には悲哀と、……

……。

『グラアシヤ!!』とキリイム・イワアアウキッチの叫び聲が、再び聞へて來た。

グラヒラは手にしてゐた皿を置き、その命に服し、ザアハルの傍を通り過ぎるとき、……。

母親も休息するために立ち去つた。家の中は忽ちもの影もなく、ひつそりと靜まり返つてしまつた。ザアハルはただ一人、部屋に居殘つて、空しくグラヒラを待ちつづけてゐた。そして彼女は戻つて來ないことを知つたとき、無駄に待ち設けたことの腹立たしさが、鋭く本能的な兇惡な心を呼び起し、彼の心は新しい感情に燃へ立つた。……

……

……

……

……。

ザアハルはそうした氣持を紛かそうとして、……

……と思つてもみた。けれどもそう考へることは、非常に困難な若しいものであつた。反對に……

……やうに思はれた。

それはザアハルをして憎惡と絶望によつて、去就を忘れさせてしまふまで恐ろしいものであつた。……

……。しかしそうしたことを決行

する力もなく、極度の悶えの心に一人惱みつづけた。

夕方、皆がベランダで茶を飲んだ。碧空に紫色した太陽も、除々と土藏の屋根の彼方に落ちていつたが、なほ、ベランダの硝子は、鎔けるかと思はれる程燒きつけられ、實に息詰まるやうな暑さであつた。グラヒラは赤く汗ばみ、髪の毛は額に粘りついてゐた。彼女は茶をついで廻つた。母親は口笛を吹くときのやうに薄い唇をとがらし、眼を白くして懸命に小皿を吹いてゐた。蒸しつけられる暑さで全身びつしよりになつたキリイム・イワアノウキッチは、なほ苦しい夢からすつかり醒めないやうな風で、幾杯となく續けて茶を飲んだ。皆は押し默つて、ただ流れ落ちる汗を絞りながら吐息をしてゐるだけであつた。ザアハルは鋭い險惡な眸差しを、他の人々に氣付かれないやうにしてグラヒラに時々差向けてゐた。彼には彼女が安らかそうに滿足して、しかも幸福であるかのやうにさへ見えた。彼は彼女を憎み兄を怨んだ。そしてこの二人を一思ひに殺してしまひたい氣さえ

した。

グラヒラは確かに始めから彼の心を察してゐたらしかつた。と云ふのは、彼女の手は人目に立つ程顫え、そして彼女は、努めてザアハルを見まいとしてゐた。

お茶が終つた頃には、太陽も沈み、眞紅に燃え立つてゐた陽炎も土藏の屋根の彼方に消え、餘光の弱い影が庭先にさして、微かなすがすがしい涼風が漂ひ始めた。母親は家事の世話に立ち去り、キリイム・イワアノウキッチは玄關先に出て行き、そこで涼むために腰を下し、胴着を脱いでぼんやり前方に視線を投げてゐた。

ザアハルはグラヒラが食器を纏めだすと、更に又一杯を飲み干した。彼女は皿を取らうとして食卓の上に身を差し伸し、それがいかにも偶然だつたといふ風に怖々と、……れた。と彼はぶるつと身顫して彼女に眼を投げた。そして彼に注がれてゐる彼女の罪と祈りとの表情の籠つた黑い、スガ眼を見たとき、突然、萬事は過ぎ去つた空虛の殘骸であることを思ひ起し、荒々し

く手を引こめた。グラヒラは何か言葉をかけたい様子であつたが、ザアハルはつと立ち上ると玄關口の方へ出ていつてしまつた。彼女は悲しい驚きの眼をもつて彼の後姿を見送つてゐたが、思はず手にしてゐた皿を取り落してしまつた。

『おい！　お前またそこで――』とキリイム・イワアノウキッチは腹立たしげに云ひ放つた。

グラヒラは恐怖に身を慄はし、鼠の樣に音も立てず破片を拾ひ集め始めた。

玄關先に腰を下したザアハルは、シガアを口に當て地上に眼を投げてゐた。キリイム・イワアノウキッチは今日の客のことで話を持ちかけたが、ザアハルにはてんで相手の云ふことが耳に入らず、ただ熱心にベランダの方の跫音と食器の音に氣を取られてゐた。彼は自分がいかに亂暴に、そして慘酷にグラヒラを侮辱したかをはつきり意識した。しかしそれはただ彼に、病的な兇惡な滿足を與へたに過ぎなかつた。

『彼女には、これ位のことを加へてやつたつていいんだ』彼はかう考へた。

グラヒラは長い間ベランダで働いてゐた。……を待つた。しかもザアハルは意地惡く別の一方を睨め、彼女のことなどには無關係であるかのやうな素振を裝つた。彼女は、二度程家の中に出這入りして、食器の片付けがすむと行つてしまつた。ベランダの邊はひつそりと靜まつた。突然ザアハルは、ひどく或る淋しさに襲はれた。……、その爲どう云ふものか、小心に、心がおびへ出した。

キリイム・イワアノウキッチは無頓着で、兩手を突張り太つた腹を前方にのしかけ、ゆつたりと自信のある見解をもつて次のやうなことを述べた。

『堅實な老人だ！　驚くことに五十萬と云ふ財産を持つ身でありながら、なほ農奴のやうに働くと云ふぢやないか。八十の歳を越してゐるといふのに――短い生涯ぢやないよ――俺も彼の家にも行つたことがあるが整頓したもんだ――その

息子達と云つても既に白髪のある年輩だが、親爺の前に座るなんてことはてんでないんだ。嚴格な老人なんだ！　娘達と云へば、一流の富家に嫁いでゐるし――知事でさへ彼には尊敬をもつてゐるからねえ――。それは一體どういふ譯か？　といふのは他ぢやない。彼が終始自己の運命に忠實であるからなんだ。彼は常に云つてゐる、「自分は商人だ、だから商賣以外の他の凡ては自分にとつては無關係なことである。俺の目的は、資本を蓄積して、しかもそれを安全に子孫に讓るにあるので――子孫の繁榮の爲なんだ」と。だが老人も女のためには、隨分と金を振り撒いたもんだよ。獨身に加へて健康體と來てゐるんだ！　それあ！　女をだつて可愛がつたさ。それもそうさ、相等に働いて來たんだもの。その位のこたあ！　當り前のことさ。』

白い被布をしたグラヒラの姿がチラと見えた。と思はず、ザアハルは身を顫はした。裏木戸の方にあたつて門のくぐり戸の音がした。

『お互は、何の爲めにこうして生活してゐるんだ？』

さつきの食事中のことを思ひ出しながら、キリイム・イワアノウキッチは哲學的な頭になつて考へるのだつた。

『我々は、それぞれ自己の滿足を求めるものであり、そして人間には各自の運命といふものがある――適者は榮達するし、弱者は滅亡してゆくのだ。これが法則なのだ。試みに、自由だとか平等だとか喧しく云ふものがあるが、そんなことは俺の見解の範圍からすれば空虛なことなんだ。それはだ、若しお前が法律の道に適つて生活し、一定の仕事に働いてゐるとする。そしたら何人もお前に干渉する權利はないんだ。彼は勞働者であり、俺は商人で、お前は、假りに官吏か將校とする――各人はそれぞれの方面に從つて、相當の義務を果す責任がある。斯くしてこそ社會の秩序は完全に維持されてゆくんだ。若しも、各人が例へそれが善良な事であるとしても、皆が同一のこと丈けを選んで向つたとしたらどうなる？

それこそ凡ては無茶苦茶だ！　吾が國民は一體無智だ！　彼等には想像力なんかありやしない。彼等は、勝手に爭鬪し合ひ、結局は共倒れで潰されてしまうくらいが關の山だ。ただそれ丈けなんだ。野蠻な國民だ！　今一歩讓つて考へて見ても、各自が悉く金持ちになれることは不可能なことぢやないか。この地上には、それを容れる程の富はないのだ。と云つて凡ての者が乞食になればいゝと云ふ譯も云へないぢやないか？』

『勿論、そうあ、そうかも知れない』とザアハルはいい加減に調子を合した。心の内では、グラヒラが外出した行先についての想像で一ぱいであつた。

『いや待て！』と中途で言葉を遮つて、熱して來たキリイム・イワアノウキッチは更に言葉をついだ。『凡ての者は食はんと欲してゐる。だから各々が働いてゐるんだ。敎會も、國家もこの必要に對して產れたのだ。で若しお前が、乞食に物を惠んだとする。と彼はそのために反省をするだらうか？　生活といふものは、

そんなものぢやないのだ。詩人も云つた。「勞働は、人間に悅びや滿足なものとして與へられたものでなくて、その罰として賦與されたものである」と。誰が好んで自分で自分を罰する奴があるものか？　鞭の必要があるのはそこなんだ――。』

『キリイム・イワアノウキッチ！』と、玄關先に歩いて來た一人の勞働者が云つた。『あちらで、小供達が金を受取り度いと云つて待つてゐますよ。この間貴方がお約束されました』『約束したが、どうした』とキリイム・イワアノウキッチは顏を少々顰めた。『落着いて話をする暇もありやしない。』彼の今迄の温良な表情は忽ち怒りつぽい面相に變つた。

ザアハルは彼の言ふことに、かなりいやになつてゐたので、これを機會にット立ち上つて、家の中に這入つて行つた。家の中は既に暗く、ひつそりと靜まりかへつてゐた。恰も空屋の樣な感じを與へるのであつた。彼は帽子を被り、暫く躊躇して室の中央に突立つてゐたが、突然爪先立ちに廊下を通り抜け、裏木戸を出

るや否や駈け出した。

門の外には、勞働者の一群が集つてゐた。或る者は突立ち、或る者はベンチに腰を掛けてゐた。彼等はマホオルカ(下等煙草)を吹かしながら唾を吐き、頻りと誰かを罵つてゐた。ザアハルがくゞり戸から往來に出たのを見ると、彼等は云ひ合せたものゝやうにぴつたり話を止めて、默つて彼を見送り、そして彼が大分歩いて行つた頃、彼等の中の一人が、餘り大聲ではなかつたが、しかし、はつきりと聽き取れる程度で、『……。』と云ふと、それにつれて皆が一度にどつと笑つた。丁度牡馬の群が一聲に嘶いたかのやうに。

ザアハルはその惡口を耳にはしたが、しかしグラヒラのことのみを思ひつめてゐたので、それらの言葉の裡に含まれてゐた恐しい意味をも、心に留める餘裕はなかつた。彼は散歩してゐるのだと思はせるように、廣場の中央に出て堤の上に登り、そして直ちにグラヒラの姿を見出した。

彼女は河邊を指して歩いてゐた。肩掛が、灰色の殺風景な廣場の中に目立つて白く浮出してゐた。ザアハルは一目見ると、彼女が歩いてゆかうとしてゐる目的地をすぐと察した。といふのは、橋を渡つて青い廣々とした芝地になつてゐるその川岸の附近には、白揚の老木が茂つてゐて、その芝地は曾つて二人してしばしば來たことのある想出深い場處であつた。グラヒラが先程、殊に外庭を通り拔けて行つたのは、ザアハルに自分の後を追はせるために態々試みたものであつたやうに信じられた。

ザアハルは四圍を注意深く見廻した。家々の窓は暗くボカされ、勞働者達はすでに邸内に歸つて、門の外には人影すら見えなかつた。邸内から微かにキリイム・イワアノウキッチの怒鳴り聲が聞へた。

ザアハルは忍ぶやうにして堤の上から下り、もう一度不安さうにあたりに目を配つた。……。

川の上空は暮色を帶びて濕々した涼味を一杯に湛へてゐた。幸なことには休日だつたので煤けた鍛冶屋の戸も閉められ、橋の上にも人影はなかつた。軈てザアハルは芝地に行き着いた。

グラヒラは、深い濕つた草叢に踏み分けられて出來た道を歩いて、既に遠く行き過ぎてゐた。彼女の白い肩掛が綠の月の光に照されて、それが氣持よくちらついて見えた。

彼女はザアハルの跫音を聞きつけたのであつたが、彼女は急ぎの用事で歩いてでもゐるもの丶樣に、さつさと振り返りもせず前方に歩きつゞけた。そして丁度二人がエニシダの蔭に這入つたとき、彼女はふと、立ち止つた。そして彼に振り向き、悲しさうな、しかし、魅惑的な微笑を泛べた。ザアハルは彼女の燃えるやうな唇やふくよかな肩、肉付きのい丶體格等に目をつけた。今、彼女は彼の前にこれ迄になかつた程の艶麗な姿となつて、彼の目に映じたのである。しかし、彼

女の懺悔に似た微笑は、彼をして頭の中が逆上して混亂する程、彼に憎惡の念を燃へ立たしめた。

彼の眸差しは餘程もの凄かつたに相違なかつた。なぜと云ふに、彼女の微笑は瞬間にして消失せ、その顏が急に蒼白く變つていつたからである。

『ゾオニャ！――まあどうしたと云ふの、ねえ！　どうしたの！……』彼女は吃りながら、突然早口に云つて、片手を差し上げた。

この動作は、とつさの間に何ものかを決心したかの樣であつた。ザアハルは僅かに拳を振り上げ、グラヒラの頭をいやと云ふ程撲りつけた。グラヒラは哀しい悲鳴を上げてよろめいた。肩掛は舞ひ落ち、櫛は拔きとれて叢の中に飛んだ。彼は自分でも信じられない悅樂を心に味ひながら、更に又一擊を加へた。グラヒラは二度目の打擊で地上にはひつくばり、聲を立てて泣き出した。

思ひがけなく、憐憫と恐怖と絕望の念がザアハルの心を襲ふた。暫らくは彼は

忘失したやうに泣きくずれてゐるグラヒラを凝視してゐたが、軈て素早く背を返して一方に立退き、そして白揚の老木の冷く荒い幹に、ひたと額を押し當てた。彼の心は空虛と暗黑の外何ものもなかつた。そして彼は、二人の關係の一切が、今その終局をつげたことを思つた。

『さあ！　これで萬事だ。』彼の腦裡は絶望の中に旋廻した。

と、……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……。

『侮辱したり、――打ち叩いたり――まあ、何としたことなの――』と彼女は恰も感覺を失つたものゝ樣にこぼした。

ザアハルは今、嫉妬も、憎惡の念も、そして絶望の心も、いづれにか霧散してしまつた。そして、綠の壁によつて全世界から隔離されてゐるやうな、この濕つた柔かな草の上に、彼等二人丈けが出現してゐることが、彼自身、不思議な樣な氣がした。

それから彼等はやゝ暫くの間、岸邊の草の上に座つてゐた。……

……。

『……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……。』

ザアハルは彼女の言葉に耳を傾けながら、次第に黒ずんでゆく川向ふの菜園畑を眺め、默りこんでゐた。彼には亢奮が始まり、哀愁と嫉妬の心が新に彼に喰入つて來た。が、哀愁は靜肅さであり、嫉妬は鈍く、疲れたものであつた。

『ねえ、あの人が死んで呉れたら――と思ふのよ。』

突然グラヒラはこう微かな聲で囁いて、首をうなだれた。その爲めにザアハルには彼女の顏が見えなかつた。

ザアハルはただ身を顫はしただけで、再び沈默に耽つた。

『私、あの人を……かも知れないわ。――いゝえ乾度よ。譯はありやしないわ。』

瞬間、ザアハルの心の中には暗い喜びが慄へた。しかし彼は忽ち思ひ直し、そして恐ろしさの餘りぞつとした。

『馬鹿なことを言ふもんぢやない。』と彼は言葉を挿んだ。

『いゝえ、馬鹿なことぢやないわ――。』彼女は頑固にきつと言ひ返した。……

……。

『だが、それからどうしやうと云ふんだ？』と云つた彼は意地惡く笑ひ出した。氷のやうに冷くなつたグラヒラの指は力なくザアハルの腕をかすめた。彼女は頭を垂れた。

『後になつて解るわ。どうだつていいぢやないの』と、殆んど聞き取れない位の細い聲で、彼女はささやいた。

二人は默りこみ、身動きもしないで、尙長い間座つてゐた。突然誰か芝地の向ふで强い音で口笛を吹き鳴した。グラヒラは驚きの餘り身顫ひして頭をもたげた。そして恐怖に滿ちた顏をして膝を立てた。

『大變ですわ。ねえ、どうしませう!!』

ザアハルはその音の方へ目を走らして見極めようとしたが、そこにはただ、暗黒の闇があるだけであつた。町の屋根と、教會の黒い姿の上方に當つて、僅かに明るい夕映の線が擴つてゐるだけで、暗がりに蔽はれかけた空の彼方には遠く、そして深い夜空に點々と星の淡い光りが輝き出してゐた。川筋に副ふてその邊の上には霧が棚引き、そして芝地の中も心の滅入るやうな淋しさに包まれてゐた。

ザアハルは心中冷水を浴る思ひがした。家では既に皆が夕食につき、彼等が不在してゐることに氣付いてゐる筈であつた。

恐怖が双方を襲ふた。そこで二人共、草を蹴立てながら急いで芝地を過ぎ、もと來た道に引返した。

それは未だ遠方からではあつたが、既に食堂には窓にさす灯が見られた。一同が食事についてゐることはそれで確かであつた。二人は殆んど駈け出さんばかりにして急ぎに急いだ。グラヒラは嵩じた恐怖のために、足が思ふやうに捗らなか

つた。それに呼吸がはづんで、ともすれば氣息が詰らうとした。

門の側で、或る黒い影が彼等に向つて近づいてきた。グラヒラは怖々と仕方なくその影の方へ近寄つた。彼女はそれがキリイム・イワアノウヰッチと思込んだからであつた。ザアハルも同時に悸つとしたが、前方へ歩み寄り拳を固めた。

しかし二人はこれ迄によく聞き馴らされてゐた、とんちんかんのピョオテニカの唸る聲を聞いた。白痴は大口を開いて笑ひながら行手を遮つた。

『おい、お前は何をするんだ！』

なほ顫えながらザアハルは強く詰問した。

ピョオテニカは早口に喚いて、そして後の方を指して眉を顰めた。彼はキリイム・イワアノウヰッチが腹立ててゐるといふことを云はふとしてゐたのだつた。

そこで彼はグラヒラを指先で突き、そして次に自分の胸を指してみせた。

『さ——散——歩——歩』と慌てて云つた。

ザアハルの心はそれでやつと少し落付いて來た。彼はピヨオテニカが凡てを心得てゐて、彼等を危地から救ひ出さうとしてゐるのだといふことを見てとつた。それは、グラヒラが自分――ピヨオテニカ――と一緒に散歩してゐたと、彼女が家に歸つてから辯明の出來るように、取りなしてやらうとしてゐるのだと了解した。

『ピヨオテニカ、よくやつてくれた！』と、ザアハルは思はず輕い氣持になつて云つた。

『グラアシャ！　彼と一緒に行つてくれ。――一緒に散歩したのだと云ふのさ。――そこはうまくね。俺は後から、市からでも歸つて來たやうに裝つて行くから――。』

グラヒラは直ぐと合點した。が、なほまだ躊躇してゐた。兎に角彼女はそれがまた恐ろしかつた。

『お行きよ、――お行きよ――何でもありやしない。』と云ひながらザアハルは優しく彼女を押し出すと、素速く身を返して今來た路へ引返していつた。

彼は、彼女がくゞり戸を開いて這入つていつた跫音が玄關の方で軌るのを聞きながら、後にただ一人で殘つてゐた。やがて彼はふと、さつきの門の外で耳にした、彼に浴せられた勞働者の惡口を思出した。そして自分達の關係を知つてゐるものは、ピヨオテニカ一人でなくて、外にまだ勞働者達の全部も、或は更に町の人々の凡てまでが知つてゐるのかも知れないと云ふことを悟つた。この想念は、彼として心中冷水の思ひであり、そして自ら恐ろしい危地の斷崖に立つてゐることを思はずにはゐられなかつた。

七

……

……

……。それといふのも彼等は等しく主人を嫌惡してゐるので、主人の不名譽のことを寧ろ心好く思つて北叟笑んでゐたからである。そして老人達はグラヒラとザアハルを常に非難したが、若者連は冷笑をもつて看過し、寧ろザアハルを偉いものだと云つてゐた。

『彼は赤い舌を出してゐるんだ――偉いもんだ。大將の鼻をあかしたといふも

んだ！　いゝ年をしてからに、若い女を嗅にするなんて大體量見が違つてらあ！まあ、堀つた穴に自分が落ち込むやうなものさ。』

キリイム・イワアノウキッチは、白痴のピョオテニカが彼の脊後へ突立つたのを、女工達が袖で顏を隱しながらクスクスと笑ひこけたので、それと氣付いた。彼が振向くといつもそこには、常と變らない無表情の鈍い眸差しの阿呆づらをした顏が、自分に注がれてゐるのを見た。

『貴樣！　後で覺えてゐやあがれ！』と常にかう云つて、ピョオテニカを指で示しながら脅しつけた。

しかし彼は、ピョオテニカがあゝした眞似をする、その理由の根源を確かとつきとめて置かうと決心した。しかも或時彼はピョオテニカが彼の脊後から、ナイフを握つて迫つてゐるのを運よく發見した。

キリイム・イワアノウキッチは沈默を守つて、そして強いて何事もなかつたか

のやうに裝つた。が薄暗い家の中に戻つて來たとき、大膽にしかもいそいそと廊下を通つて、何處へか出て行くグラヒラに出會つたとき、彼は近付きながら輕蔑を浮べた眼で彼女を見送つた。

食事の際、彼は終始人目に立たぬ樣に、妻に眼をつけてゐた。そして今更のやうに、彼は美しく、妙にきは立つて爛熟したグラヒラを見出した。

『毒蛇だ、まるで毒蛇その儘だ。』かう一人考へながら、彼は嫉妬に滿ちた深い猜疑の心を湧き立たせた。

彼は突然、グラヒラがまだ處女時代のころ、彼女は如何にもお轉婆で、そして大膽な娘であり、騎士連が彼女の尻を追廻したことなどをいろいろ思ひ浮べた。そして彼女が自分と結婚する以前に、既に戀人をもつてゐたのかも知れないと云ふ考へが彼を恐しい迄に眩惑させた。しかしそれは事實あり得ることのやうにも彼には思はれたのであつた。

『或はあつたのかも知れん。俺は？　そうと！　あの時は醉佛つてゐたが、そこには取るに足らない田舍者ばかりだつた筈だ。親爺は、お人よしの、まるでペテン師ぢやあつたが……』

キリイム・イワアノウキッチは彼の求婚の申出が、存外と手取早く受容られたことの記憶を辿つて考へてみた。その當時は彼は、それはとりも直さず自分の人格的價値と、金力の賜のためであると考へてゐたが、今となつては見解は全く別なものであつた。

『一杯食はされたんだ！　解り切つたことだ！』こう考へると同時に彼の太い頸は紫色に變り、顳顬には青筋が腫れ上つてくるのであつた。

そうした思ひで彼がグラヒラを見るにつけて、彼女に對する彼の苦悶猜疑は、益々募つてゆくばかりであつた。キリイム・イワアノウキッチは、妻には戀人が屹度あるに違いないと考へ、それは疑ふ餘地のない事實であると思ひきめた。が

戀人が果してあるにしても、彼にはその相手が誰であるかを想像することは困難なことであつた。ザアハルに對しては、たゞの一度だつても彼は想像を及ぼしたことはなかつた。彼としては、それは夢にも思浮べることさへ許されないことであつて、想像してさえ羞づべき筈であつた。

一方グラヒラにしたところで、何處かへ只の一度でも一人で外出したことがなく、常に彼か母親と一緒だつた。彼は若い勞働者達の中に、誰彼と物色してもみた。けれ共そうしたことは彼にとつて、餘りに馬鹿氣てゐるのに氣付いたのであつた。それは自分を裏切つた妻にせよ、憎い妻にせよ、あの美しさをもつた彼女が、何う思つてみても、あの平凡な汚らしい百姓達の誘惑の手に陷るなんてことは考へ得られないことであつた。

『どうして、彼女はそんな女ぢやない。』とキリイム・イワアノウキッチは一人で思ひ惱んだ。

それからの彼の心は猜疑と苦惱に、そして誇を傷けられた腹立たしい思ひで寸斷され、彼は惑亂の餘り妻の行動を監視しようとして夜眠ることさへ恐れた。がただ到る處で罪惡と羞恥とを思はせられるのみだつた。しかもこの事に就ては誰にも一言も口外せず、そして妻に對しても、彼女を疑惑の目をもつて見入るなどといふ素振さへ現さなかつた。ただ彼の顏は暗く沈み、心持は氣むづかしさに變つて、妻に對する愛を棄てて恐しい熱心さで家計上の事に奔走した。

ヂイキイ家を蔽ふた暗雲はいよいよ迫つた。菜園に働く小娘達でさへ、何かしら或る不吉を嗅ぎつけるようになつた。

『逃れつこない事だ。本當に困つたことになつて來た。』こう云つて、下女は嘆息を洩らした。

老人の御者マッウエイは、何故か自身にも解らないが突然暇を乞ふた。

ザアハルとグラヒラだけは、何事も氣付かないでゐた。

かの偶然の機會から、二人が家を脱出して幸福を見出した夜からの彼等は、最早凡ての遠慮を振り棄ててしまつてゐた。初の頃こそは、その發端がいつもザアハルの辛抱し切れない氣持から出たものであつて、グラヒラは恐怖で神經が痺れそうにさへなるのであつたが、しかしこの頃は事實その役割は正反對になつてゐた。と云ふのはグラヒラは殆んど氣が狂つてしまうかと思はれる位無中になつてしまつてゐた。……………………

…………………………………………………………

…………………………………………………………。ザアハルはあつけにとられてしまつたが、彼女はただもう愉快そうに笑ひ出した。母親が『お前何をくすくす笑つてゐるのだえ?』と詰問したときも、彼女は萬事が眼中にないかのやうに平氣で云つてのけた。『ザアハルさんにからかつてゐるの!』

母親は一人怪しげな眼を彼女に注いだゝけで何事も云はなかつた。老婆もやはり心の中に何か或るものを感じた。たとへそれが疑念として、なほ老婆自身にはつきりとしない迄も、老婆の心に殘される何ものかがあつた。

それから數日經つた或日のこと、キリイム・イワアノウキツチは商用でまる一週間の豫定で旅に出ていつた。……………………

…………………………………………………………

…………………………………………………………

…………………………………………………………

…………………………………………………………

…………………………………………………………

…………………………………………………………

…………………………………………………………

……。

……

……。

グラヒラは夫が歸宅するなどとは、てんで頭の中に考へてゐなかつた。偶々窓外に、見馴れた馬、馬車、そして埃にまみれた御者を見付けたとき、彼女はまるつきり豫期しなかつた恐ろしい不幸に逢遇したかのやうに、心は突き刺される思がした。凡ては今終りを告げて、再び以前にあつたやうな限られた、そして遽しい偶然の……時機を待たねばならないときが戻つて來たのかと思ふことは、彼女には恐ろしくさへ思はれた。數日の間は努めて自制して惱みつづけたが、遂に恐ろしい冒險を決心してしまつた。その夜キリイム、イワアノウキッチは眠り込んでゐた。ぐつすり夜具の中に身を埋め、口を開け嵐のやうな呼吸をつゞけてゐた。部屋にはランプが點つて、彼女の幻影が神秘的に壁の邊に彷ふた。そして窓

欠

……。

ザアハルは眠つてゐた。そしてその部屋は眞暗になつてゐた。……

……。

『……？……？』……。

……。

欠

『……？……？……！』……

……。

……

……

……

……

……

……

……

……。

……

……

……

……

……。『どうなつたつて仕方がない。結局はなるようにしかならないんだ。』彼の心には、こうした氣持が働いてゐた。

こうして過ぎた或夜のことであつた。キリイム・イワアノウキッチはふと目を

醒ました。と妙に物足らない淋しさから、それと氣付き吃驚した。ランプは何時もの通り點されてあつたが、グラヒラの場所は空になつてゐて、しかも既に冷くなつてゐた。初めキリイム・イワアノウキッチは詮索もしないでゐたのだつた。が突然、恰も誰か彼を突き飛ばしたやうに我に返り、むつくり起き上つて座り直つた。彼は最初、グラヒラは朝起きしたのだと思つた。それにしては邊りに人の氣配のない譯はなし、それに開いてゐる扉口の外はしんとして暗かつた。

凡ゆる猜疑の念が一時に頭に押し寄せてきた。先づ初めに、ザアハルに關する恐ろしい豫期しなかつた心が彼を一杯にした。彼は氣が遠くなつてしまつたかの如く寢臺に腰打かけ、太い丈夫そうな毛脛の足を床の上に投げ出し、さてどうしたらいゝものか解らなかつた。彼の頭の中に浮んだ考へは、如何にも恐ろしいものだつた。で彼は、グラヒラが姿を隱したことに對しての凡ゆる説明を工夫しながら、その恐ろしい想念を拂ひ退けようとした。

しかし折の悪いことに、丁度その時扉口の暗い空氣が搖れて、その中から白い影が浮び出て來た。グラヒラは素早く部屋の中に這入つて來た。空氣の搖れた爲めか或は他の原因であつたか、ランプの灯が急に明るく燃へ立つて、剝き出しになつた彼女の肩と足と、そして襯衣の解きほどかれて皺くちやにされてゐる彼女の全身をまざまざと照し出した。

夫の姿を目前に見出したとき、グラヒラはまるで埋れこんだもののやうに立ち竦んだ。そしてこの彼女の驚愕は突然、キリイム・イワアノウキッチに最後の手段を選ばせてしまつた。

『あゝあゝッ！』それは彼の絶叫でもなく、怒鳴つた聲でもなかつた。こうした頓狂な聲と共に彼はその太い胴體にも拘らず、一氣に扉口とグラヒラの中間に飛び込んでいつた。

彼女は餘りの驚きに度を失つて、逃げ出す暇もなかつた。ただ僅かに素手を前

方へ延して、後去りを初めただけだつた。何うとか辯解してこの場の危急から逃れようなどとは全然心には浮んでゐなかつた。夫の樣子が餘りの兇猛なものであつたので、そうしたことが無駄であると見てとつたのであつた。キリイム・イワアノウキッチは彼女の首筋を掴んで、彼女の脊と後頭部とを、後の壁に強く叩きつけた。そして彼女はそのときただ輕くその手に縋りついただけであつた。恐怖で大きく見開かれた彼女の黑い眼は、眞面に、不動の儘に彼の顏をじつと瞶めてゐた。

一切は沈默に返つた。キリイム・イワアノウキッチは、彼女が殆んど一歩一歩に素足を運ぶことの出來ないまで、手荒く彼女を壁際から部屋の中央に曳き出して床の上に投げ倒した。グラヒラは一旦手をついて體を支へたのだつたが、直ぐと又横に倒れた。襯衣は肩から脫け、しかも裾は腰帶のあたりまで捲り上げられて、爪で引搔かれた胸は露出し、顏一面に髮の毛の亂れかかつた、殆んど裸體に

近い姿となつたグラヒラの形相は、丁度傷いた野獣のやうに物凄く見えた。キリイム・イワアノウキッチは、彼女を床に壓し付けて擲ち始めたとき――頭と云はず、剝き出しの脊と云はず、胸と云はず、腹部と云はず、或は拳で、又は膝で、足で――彼女は叫びもせず藻掻きもしないで、ただ少し唸つただけだつた。時々彼は彼女の髪の毛を掴んで引廻して位置を代へ、再び壓しつけて擲つのだつた。齒を喰ひしばつておし默り、重い吐息を漏らしながら擲ちつづける彼が、その場合思ひ詰めたことは『たつた今、この場で彼女を毆り殺してやる』と云ふことであつた。

椅子は打倒れた。卓子は搖れてグラヒラに突き當つた。勘定書の紙は床の上に飛散して、置物は大きな音を立てゝ床の上に轉がり落ちた。廊下に眠つてゐた小娘はその物音に驚いて、何事も知らずに跳ね起きて來て見たが、慄え上つて、壁にびつたり、ひつ付いてしまつた。母親は、目を覺まして寢臺の上に座り、そし

て初めの程は、家の中に盗人が這入り込んだものと思ひ決めたので、危く救ひを叫ばうとさへしたのだつたが、とぎれとぎれに罵るキリイム・イワアノウキッチの聲と、そしてグラヒラの呻き聲、更に又素肌を擲つ音を耳にしたとき、母親は自らボンヤリと抱いてゐた疑惑の念が、電光のやうに頭の中を閃き走ると、直ぐに出來事をそれと見當づけた。そこで母親は手を打ち、無理やりにスカアトに體を包むと廊下に駈け出でた。そのとき臺所では、下女がそこに泊り込んでゐた御者と、二人の勞働者を呼び覺ましてゐた。

母親はその部屋に駈け込むなり、先づ第一に打ち叩かれて黒髪が搔亂れてゐるグラヒラの頭と、體一面が痙攣的にピクピク動き、剝き出しになつた裸足に視線を投げた。『殺すのだらうか？』と云ふ考が瞬間に浮んできた。そして嫁に對する凡ゆるこれまでの怨恨が、復讐の毒々しい喜びとなつて母親の心に起つた。

『この毒蛇阿魔には、いゝ氣味だ！　畜生奴！』

ザアハルは……。で隣室の騒音は大分過ぎてから聞きつけたのだつた。初めの中は何が何だか少しも解らないでゐた。が母親の叫び聲を耳にしたとき凡ての想像がついた。彼を捉えた恐怖と羞恥が、餘りに強烈であつた爲めに、最初の瞬間、身動きさえも出來なく、何處かへ雲隱れして、素知らぬ體を裝ふか、と思つた程彼の頭は混亂した。しかし彼がこうしたことを考へてゐるそのとき、グラヒラは遂に我慢し切れなくなつた。それは夫の毆打が彼女の口元に及んだとき唇が裂け、そして口の中に血液の味が感じられたとき、彼女は、夫は自分を殺そうとしてゐるのだと悟つたからであつた。彼の女が耐へ切れなくなつて、鋭どく短く悲鳴を上げたのは、このときであつた。

この悲鳴はザアハルの心に強く感動を與へた。自分が今正に撰ばんとする行動に就て顧る暇もなく、常軌を逸した彼は躍るやうに跳ね起きると、着てゐた寢衣

一枚で廊下を駈け拔け、母親を突き退けて寢室に飛び入つて來た。掻き破られた顏に鮮血が流れ落ちてゐるグラヒラの裸體姿と、そうして同じような半裸體の恐ろしい表情をしたキリイム・イワアノウキッチが彼女の上からのしかゝつてゐる光景を瞥視したザアハルは、異樣な身振りをして駈け寄り、恰も猫のそれのやうに兄に飛びかかつた。不意を喰つてキリアム・イワアノウキッチはそのはづみに妻から手を離し、どつと床の上に臀部を打つて倒れた。が又直ぐに立ち上ると調子外れた妙な叫聲を立てて、ザアハルの胸ぐらを目掛けて飛びかゝつてきた。

『ああッ！　貴樣！　貴樣！　貴樣！』と、それは叫びでもなければ吃るのでもなく、ただ眼を圓く大きく剝き出して奇妙な聲を出しただけであつた。

極度の狂憤は、恐るべき力强さを彼に與へた。ザアハルは彼よりも年若で、力も强かつたが、まるで小兒が弄ばるやうに彼の爲めに揑り[illegible]時若しもグラヒラが彼の足に縋りつかなかつたなら、ザア

殺される處であつたのかも知れなかつた。彼はザアハルにのしかからうとしたが彼女は床の上から彼の足を引捉へて放さなかつた。で彼は、彼女が戀人の肩を持つてゐるものと思ひ、益々激しい憤怒に狂ひ立ち、彼女を眞向から蹴飛ばした。グラヒラは僅かに聲を上げたのみでその儘氣絶してしまつた。

この時、頑强な腕をもつた大勢の御者や勞働者達が、部屋の中に駈け入つて、呼く間に兄弟を兩方に引離してしまつた。

『どうしたと云ふんです！　キリイム・イワアノウキッチ、氣をしつかり賴みますぜ！』と御者の一人は息を喘ましてこう叫んだ。

キリイム・イワアノウキッチは、どうやら少しは落ちついて來たらしかつた。そして氣勢と狂憤とは忽ち消え失せてしまつた。彼は荒々しく椅子に體を落すと疲のやうにうづくまつてしまつた。ぐつたりと兩手を垂れ、頭を前後左右に搖り苦しい太息をついた。そしてその朦朧とした眸差しは醉眼のそれのやうでも病的

のものでもなかつた。彼が何事かを意識してゐたか？　それは疑はしいものだつた。

ザアハルはまだ兄に抵抗しようとしたが、傍の男達は彼を捉えて放さなかつた。そして骨ばつた肩に獅子毛の白髯を振り亂し、鬼婆のやうな面貌をした母親は、そのとき鈎のやうな曲つた指をザアハルの顏の近くに伸し、金切聲を振り絞つて罵り叫んだ。

『此奴叩つ殺してもあきたらないぞ！　惡黨め！　巫山戲やがつて。畜生！　餘でなし奴。この手で絞め殺してくれらあ！　喰いついて嚙み殺してやるぞ！』

女コックは必死の聲で喚き廻つた。勞働者達は競ふやうに叫んでゐたが、御者が母親を引き退けて云つた。

『お姆さん、お姆さん――本當にあんた神樣の手前恥かしい事でさあ！』

このときザアハルは、ふと床の上に長々と横に倒れてゐる裸體姿のグラヒラを

見て、彼女は全く兄の爲めに殺されて了つたものと思つた。で彼は激しく罵りながら狂ひ始めた。しかし男達が側から捉えてどうしても動かさなかつた。彼は一時の間、狂氣の樣に抵抗して、遂に男達を突き退けて廊下に飛び出した。そして直ぐと自分の部屋に駈け入ると、壁に掛かつた銃を取はづした。狂亂の極にまで達した彼は、その場で兄を射殺しようとして引返して來た。

『あれえッ』と召使の小娘は、銃を見て叫びながら一氣に飛びついて來た。

ザアハルは發砲する隙がなかつた。と云ふのは母親が銃に取り縋り、御者がその道を遮ると他の一人の勞働者が彼の脊後から兩手で彼を抱き占めた。皆はその部屋から彼を曳き出して彼の部屋に押し入れ、そして外部から戸に錠を下してしまつた。彼はやや暫くの間は拳骨や足で、戸を叩いて叫んだ。

『開けて呉れ——外へ出して呉れ——犬畜生を射ち殺すんだ。』

やがて彼の部屋の物音はぱつたり止んでしまつた。彼の樣子を見に扉口の處に

忍び寄つた一人の勞働者は、彼が素足で荒々しく屋部を横切つて、寢臺の上にどつしりと身を投げかけた氣配を聞いたのだつた。

人々はグラヒラを抱き起して介抱した。女コックは彼女の血を洗ひ落し、皆で彼女を正氣づけた。母親はキリイム・イワアノウキッチを自分の部屋に連れて行つた。

幼い小供の樣に、彼は母親の言葉通りに從つた。そして母親の寢臺に座つたまま朝迄座り通した。頭を垂れ、床の上の同じ一點を瞶めてゐたその眼は動かなかつた。母親はそれでもまだ喚きながら、グラヒラが罪の發頭人だと云つて罵つたが、キリイム・イワアノウキッチは何時迄も沈默を續けてゐた。

家の中はやつと靜まりかけて、臺所で勞働者達の囁く聲と、白痴のピョオテニカがひどく慄へ上つて物置の中に體を隱し、母親が『しつ！　默れと云ふに、この餘でなし——』と怒鳴るまで、彼は牝牛のやうに唸り續けてゐた。

八

朝になつてザアハルは自由に開放せられた。彼の顏色は蒼白く、そして彼は眼を伏せたまゝ上げなかつた。

『ときにザアハル・イワアノウキッチ、貴方は農舍の方へお出でなすつた方がいいと思ふんですが。實は――貴方の爲めに、馬の用意も出來てますんで――お嬶さんもそう云つてます。兎に角ここにお出でだと、亦どんなことになるか知れない。御覽なさい、まるつきり度を失つてるぢやありませんか。』

ザアハルは暫く考へてゐたが、結極御者の言葉に從ふことにした。實を云へば

彼としてもその儘止つてゐようなどとは思つてゐなかつたのだつた。彼は着物を着換へ臺所から庭へ出た。そこにはすでに馬の用意が出來てゐた。彼は車の中に座つたとき、鋭く視線を寢室の窓の方へ注いだ。門口に立つてゐた數人の者達は默つて、意味ありそうな眼付きで彼を見送つた。

車の軌る音を聞いてキリイム・イワアノウキッチは、ザアハルが家から出發していつたことをさとつた。

『出掛けたんだよ』と母親は云つた。

キリイム・イワアノウキッチは一つ處を瞶めて沈默をつづけた。

グラヒラは終日姿を見せなかつた。彼女は目ぶちの邊をひどく傷けられ上唇も腫れ上つてゐた。そうした變り果てた彼女の樣子は、恰も、彼女が變挺な假面を被つてゐるかのやうに見えるのだつた。彼女は絢のやうに身を縮め、肩掛けで顏を匿して寢臺に横はつてゐた。體一杯に破の女は痛みを覺えて、手と足は千切れ

るかと思はれるまでに痛んだ。彼女はザアハルのことも、そして亦自分の恐ろしい恥辱のことも、既に頭の中から失はれてゐた。全心を上げてただ夫と顔を合せる――そのとき夫は自分を殺すかも知れない――その一つを思ひ煩ふのみであつた。

しかしキリイム・イワアノウキッチは、容易に妻の部屋へは這入つて來なかつた。たゞ母親が二度ばかりその部屋に立ち寄つたのみであつた、母親の跫音を聞きつけるとすぐに彼女は顔を覆つた。肩掛を一層硬く緊めて、恐怖と羞恥とで體の冷くなるのを覺えた。母親は殘忍な憎惡の心で毒々しく彼女を見やりながら、しは嗄聲で、

『寢てゐなさるのか毒蛇奴！　うんそうよ、寢てる方がいいんだ！　何だつてメソメソしてゐなさるんだ！　人に顔を見られるが恥しいのかえ？　この穀潰しの横着奴が！　叩き殺しても腹の虫が納らないんだ。』

母親の去つた後で、グラヒラを看病してゐた女コックのアニイシヤは、いろいろと彼女を慰めるのであつた。

『何でもありませんよ、奥さん。誰の處にだつて罪や不幸はありますもの。人の噂も七十五日つて云ひますよ。叩かれても我慢してゐるさね――そうしてゐる中に亦好いこともありますよ！　どうして殺しなんかなさるものですか――何が何でも兎に角御主人にとつては奥さんなんですもの――』

何時もの通りの時刻に、キリイム・イワアノウキッチは一見何事も變つたこともなかつたかの風に庭に出た。彼は一夜のうちに肉がげつそりと落ちこみ、一度に澤山の年を加へてしまつたやうに見えたのであつた。彼は常のやうに仕事を見廻つて歩いた。既に働かうとはすまいと思はれた男女の勞働者達は、急にどうやら卑屈と思はれる位までに温和しくなつて、これ迄の樣に主人の顔を盜み見ることさへもなくなり、熱心に仕事に精勵するのであつた。主人の命令に對しても、

驚く程の迅速さで成し遂げるのであつた。キリイム・イワアノウキッチは、彼等がしばしば意味ありそうな素迅い目付で自分を見るのを看知してはゐたが、素知らぬ風を裝つて顏色にも出さないでゐた。

晝食は母と差ひ向ひで濟したが、食欲は進まず酒さえも飲まないでしまつた。母親が再びグラヒラを罵り呪ひ始めると、キリイム・イワアノウキッチはやはり默り込み、母親は全然自分に關係もないことを喋つてゐるやうな氣さえした。が女中の口から出たことだと云つて（實際は皆がよく噂してゐたことであるが）母親が、……、と云ふことを聞かされたとき初めて、キリイム・イワアノウキッチは苦々しく顏を上げて頭を打ち振つたのだつた。何故と云ふに、彼にはそのときまでのザアハルは、彼の眼には尠くも何等變つたと思はれる特異な點も見へず、グラヒラにしても亦、自分の妻として怪しまれるところがなかつたことを、今想ひ起したからであつた。

彼が何よりも苦痛の極みに耐えられないことは、自分のこの不名譽が今町中に知れ渡つたと云ふことである。そして又彼の氣にしたことは、弟との財產分配は免かれないものであり、しかもその爲めに全部の事業と云ふものが、それで失墜して愈々衰退して行くだらうと云ふことであつた。かうした考への二つともが等しくキリイム・イワアノウキッチに執つては、非常な苦痛なものであつた。が彼はこう云ふことを想像した。即ち自分の不名譽も聽ては忘れられて了ふであらうし、又ザアハルへの配當は出さずに濟むことが出來る。と云ふのは、弟は仕事に對しては不熱心であり、概して充分盡さなかつたとの理由が設けられるからであつた。

妻のことに就いては、キリイム・イワアノウキッチは差して別に考へなかつた。彼はグラヒラを家から逐ひ出してしまうの、乃至は彼女と別居することなどとは夢にも思はなかつた。それは彼等の社會としては許されないことであつた。グラ

ヒラは、彼にとつては法律上の妻であつて、如何なることがあつたとしても當然夫の許に殘らねばならぬ筈であつた。神が結合させたことを、人間が勝手に離別するなど出來得ないことゝされてゐた。勿論、彼女は彼を侮辱した。そして……

……考へる時、彼は心の苦痛を覺えねばならなかつた。けれ共彼は、彼女に對して執るべき方法を堅く信じでゐた、その方法と云ふのは、手嚴しく彼女を叱責することが最上の良策であり、それに依つて彼女の頭の中から一切の馬鹿氣た考へを、永久に叩き出して了ふに限ると思つてゐた。

夕方、製油所に働いてゐる職工の一人が來て、吃りながら人足達が勘定を待つてゐると告げて來た。

『ザアハル・イワアノウキッチが監督しないから、わたしも困つでしまいますので——』

キリイム・イワアノウキッチは沈默して一方を睨めてゐたが、驀て帽子を被り

緩かに廣場を通つて出て行つてしまつた。勞働者は帽子も被らず彼の後から駈けていつた。

母親はとうに夜の祈禱式に出掛けて、家の中は永久の空家のやうに靜寂になつてゐた。このときグラヒラは起き上つて、頭から肩掛を被り、そつと玄關先まで出た。彼女は影のやうに體を運び、おびえながらあたりに氣を配り、一寸した物音にも鋭く耳を聳てた。誰も自分を見てゐる者がないことを確めると、階段に立ち出でゝ、夜の空を凝視めながら深い思ひに沈んだ。

あたりには人影とてもなかつた。ブリヤン草の生ひ茂つた廣大な邸内は、墓場のやうに淋しく靜まりかへつてゐた。ただ遠くの方、土藏の軒下のあたりに犬の鎖の鳴る音と、鷄小屋でクク〳〵と鳴く鷄の聲が聞へたばかりだつた。老木の柳はその長い枝を靜かに搖り、そして町の屋根と、敎會の上空のかなたに遠く、夕映の殘光が目立たぬ位に消えのこつてゐた。グラヒラは今、どんなことを心に描

いてゐるか、言明することは困難である。がしかし、それは恐らく斷片的思想表現であり、いづれも、瞬間の中に起つては消えていつたものであることが想像出來る。

——無情な、呪はれた戀にしろ、魂の有頂天にしろ、脱がれることの出來ない羞恥（不義）にしろ、乃至は過ぐる昨夜の出來ごとにしろ——すべては夢のやうにいづれへともなく、蒼白の彼方に消えへて行つた。自分はこの先どうなることだらう？　と云ふことに就ては考へてゐなかつた。彼女にはどうだつていゝ——ことだつた。勿論彼女としても自分が打たれ、苦しめられるであらうことは知つてゐたが、しかし、そのこととても既に鈍い疲れた憂愁以外、彼女に何等の刺戟も與えなかつた。

誰とも知れず庭内へ這入つてくるものがあつた。その足音を聞きつけたグラヒラは、身慄ひして、飛び上がらんばかりだつた。がそれがピョオテニカであつた

ので、どうやら安心した。ピョオテニカは、或は、彼女に羞恥と恐怖を覺えさせないたつた一人であるかも知れなかつた。彼女は彼が決して打ちもしなければ、侮辱も惡意も持つてゐないと云ふことを知つてゐた。

白痴は躊躇して立ち止り、そして遠方からグラヒラを見守つた。その眼眸は驚いてゐるのでなければ、同情を表はしてゐるものでもなかつた。彼のボンヤリした小さい目には、どこか人間的な表情が見られた。

グラヒラは蒼白の、悲しげな顔に笑を泛べて彼に對した。そこで白痴は元氣づき、呻き出して、殆んど聽き取ることの出來ない程の素迅さで、何か譯の解らないことを喋り、兩手を振り廻し、頭を搖ぶつた。

『お前どうしたと云ふの？　ピョオテニカ』無理に聲を出すと、負傷した顳顬のあたりが耐え切れない程痛むのであつたが、努めて馴れ馴れしく彼女はこう尋ねた。

白痴は彼女の側近く歩み寄り、片手を上げ、そして汚ない指で彼女の破れた唇を指差した。彼の眼は今、全く明らかに憐憫と忿激とを現はして來た。でグラヒラは自分のだらしない姿態が恥かしくなり、遽てて肩掛けに身を包んだ。ビョオテニカは再び呻き出し、二歩ばかり後退りして、手で鐵砲の狙をつけるやうな格恰をし『バッ——』と恰も鸚鵡かなぞのやうに、耳を張り裂く樣な叫びを上げた。グラヒラは彼のその動作が、ザアハルがキリイム・イワアノウキッチを射殺さうとしてゐることを言ひ表はさうとしてゐるのだ、と解釋して悸つとし、全身の冷くなるのを覺えた。今の今、彼女は漸く、如何に恐ろしい結果が家庭に持ち上つて來てゐるかをはつきり知つた。そしてそれによつて萬事は終ることを知つた。忽ち、恰も夢からさめたやうに、グラヒラはザアハルを想ひ出し、戀人の身を思ふ恐ろしさのあまり、心臟は血に漲るのを覺えた。

『ビョオテニカ！　ビョオテニカ！』白痴の手を捉へながら彼女は早口に『お

まへ、そんなこと——お頼みする——、そんなことがあつてなるものですか——本當に、お前——、そんなこと考へてはなりませんよ——、わたしザアハルさんの爲めに、神樣にお縋りし——手を合せてお祈りします——、からつて、そのことをザアハルさんに傳へておくれ。』

しかし白痴は頑固に、否定的に頭を振つて、またも同じ樣な頓狂な叫び聲を上げた。

『バッ——。』

グラヒラはまだ何か言はうとした。がそのとき小門の開く聲がして、キリイム・イワアノウキッチの聲がしたのでハット身を起し、バネ仕掛けの樣に戸の内に身を隱した。キリイム・イワアノウキッチはそのときは既に臺所に這入らうとしてゐた。グラヒラは鼠の樣にひそやかに自分の部屋に這入り込み、大急ぎで寢床の中に飛び込んだ。そして頭から夜具を引き被り、呼吸を殺した。耳に聞こゆるも

のはたゞ、不規則に反響する心臟の皷動だけであつた。

キリイム・イワアノウキッチは、暗い、そして決意ある顏をして家に戻つて來た。製油場にはいつもザアハルが出張つてゐたので、キリイム・イワアノウキッチは殆どそれに關係せず今日迄すごして來たのであつたが、しかし今といふ今こそは、再び挽回することの出來ない程の損害の穴とも云ふべき幾多の不仕儘のあることを見てとつた。

彼はにがい笑を浮べながら、

『未だどうして——、損害はこんなことぢやないんだ！』

このことはやがて妻に對する憎惡の念とかはり、彼は、彼女がその生涯に二度と再び忘れることのない樣に彼女に思ひ知らせてくれやうと欲した。

彼には重つ苦しい殆んど盲目的の亢奮が刻一刻とつのつていつた。臺所を通りがけにキリイム・イワアノウキッチは馭者の置き忘れて行つた革鞭に目をとめ、

それを釘から取りはずし、戸口の廊下に放り出した。これを見た女コックは一言も發しなかつた。

キリイム・イワアノウキッチはムッツリとして食堂に這入り、窓ぎわに腰掛けて晩食を待ちながら、荒莫とした「セノオイ」の廣場の方に視線を投げてゐた。公園で奏されてゐる音樂が、遠方からでは又一入うるはしくやさしく響いてゐたが、キリイム・イワアノウキッチはそれには何等の注意をも惹かれてはゐなかつた。彼は食事の濟んだ後、妻に制裁を加へてやらうと腹をきめてゐた。そのことは僅かに彼の氣晴しになるやうであつた。

やがて母親が、蠟燭と、香の匂ひのまつはつたからだをして歸つて來た。廊下を通りがけに老婆は、そこに放り投げられてある革鞭に直ぐ目を留めた。忽ち老婆の顏は何とも何へない强慾な、神經的な表情に變つた。だが老婆は一言も發しなかつた。

晩食は始まつた。キリイム・イワアノウキッチは、急がず、長いことかゝつて大食した。決心は既に出來てゐることである。何にも遽てる必要はなかつた。今更グラヒラが何處かへ逃げ隠れする譯がないことを彼は知つてゐた。食事が濟んだ。彼は皿を押しやり、口邊を拭き、立ち上り、聖像に向つて十字を切つた。そこで妻の方へと出向いて行つた。だが革鞭のことは忘れてゐた。母親は素疾く自身で革鞭を取り上げて息子に追ひ付いた。キリイム・イワアノウキッチは革鞭に目を留め、うなづいてそれを手に取つた。母親は自制してはいなかつた。『あの恥知らず奴をこつぴどい目に合してやれ！　目のさめる樣に！』と母親は言つた。

キリイム・イワアノウキッチは、それには返辭をせず、寢室に向つてドアーを押し開けた。

母親は食堂に戻り、晩食後の好みの砂糖の這入つた牛乳を小皿についだ。そして食卓の側に坐りながら、事のなり行きをぢりぢりしながら待つてゐた。例の險

しい表情は未だその聖像の樣な顔から消え去つてはゐなかつた。その鋭敏な耳がどうやらピリピリ動いた樣にさへ思はれた。

女コックと小間使の娘とは臺處で食器を洗ひながらも、同樣に何事か始まりかけてゐることに耳を聳てゝゐた。

『おばさん、わたし逃げるわ！　だつて怖いのよ。おばさん！　一思ひに殺してしまふのよ、きつと。』小間使の娘は如何にもぢつとしてゐるに堪へないといふ風に全身を慄はしながらせき込んだ。

『多分殺しやしないよ！』と女コックは、すゝまぬ氣ながら云ひ返した。

馭者が這入つて來た。

『打ちに出掛けて行つたよ！』と女コックは物々しげに馭者に告げた。

馭者は、何ものかを否認するものゝ樣に頭を振つたが、何とも言はずに外套を取つて、馬小屋に寢込むために出て行つた。

昨日は血なまぐさい、異狀な事件があつたが、今日はすべて平常の通りであつた。

『こんな恐ろしい事件と云ふものは、生きて二度と見る樣なことはあるまい』

と老馭者は獨り考へた。

寢室にはランプが燈つてゐた。グラヒラは前と同じ樣に頭から肩掛を引被つて横たはつてゐた。彼女は夫が入口に現はれたことに、何にも氣付かない風に身動き一つしなかつたが、キリイム・イワアノウキッチが彼女を見据えたその瞬間、グラヒラは突如肩掛を投げ棄てて跳ね起き、寢臺の側に突立つた。兩手を垂れ、驚愕に滿ちた大きな目をみはつてぢつと夫を瞶めた。その目はその白い顏に殊更に黑々と見えた。

キリイム・イワアノウキッチはチラッと妻に投げた一瞥を横に向け、そして革鞭を卓の上に置いて、緩つくりと、急がず、脫衣を初めた。先づ上衣を脫いでき

ちんと釘に掛け、腕を自由にする爲めにチョッキの釦をはずし、身仕度が出來たところで左手に革鞭を携へ、妻の側へ歩み寄つた。彼女は目ばたきもせず、眞正面に夫を見据へた。彼女の顏は壁のやうに白かつた。『おい！』キリイム・イワアノウキッチは言葉を投げた。

グラヒラはブルッと身を慄はし、眼を伏せた。キリイム・イワアノウキッチは恰かも、感極はまつたものゝ樣に、やゝ暫らくの間彼女を瞶めてゐたが、その眼は愈々大きくなり燃え上らんばかりに血走つて來た。グラヒラは殆んど生きてゐる心持がなかつた。彼の女の兩足はすくみ、手はワナ〳〵顫えた。しばしは物音も絶えた。と突然、皮もち千切れるかと思ふ樣な猛烈な毆打をその頰に喰ひ、彼女は殆んど足を上げて昏倒せんばかりだつた。グラヒラはよろめいたが立ち直つた。キリイム・イワアノウキッチは續けざまにその同じ頰の邊を撲り飛ばした。グラヒラは寢臺に縋り付いてゐたが、とうとう支え切れなくなつて床の上に轉り

落ちてしまつた。そこでキリイム・イワアノウキッチは終始同じ樣に急がず革鞭を左手から右手に持ちかへ、念入りにグラヒラの髪の毛を自分の拳に捲きつけ、彼女を室の中央に引き曳り出した。グラヒラは逆らはず、爲さるがまゝに素直に膝をつき、頸を長く延し、倒れない樣に兩手をつつ張つてゐた。部屋の眞中でキリイム・イワアノウキッチは、妻をその髪の毛を摑んで適當な工合に引廻し打ち始めた。

彼は大きく手を延して、彼女の背を、またはより苦痛を感じさせる場所を撰んで、或は縱に、或は横に、規則正しく、調子をつけて撲つた。一回打ち終るごとに、彼は髪の毛を摑んでは、妻を無理にも前と同じ狀態に引き直した。グラヒラは逆らひもせず、悲鳴も立てず、たゞ身を慄はしたまでだつた。そして苦痛に耐えかねて、痙攣的に足で床の上をもぢもぢとこすつた。それは恰も、彼女自身がもつともつとてきぱきと打つてもらひたいと氣を揉んででも居るかの樣に思はれ

た。

間もなく彼女の着物の釦はとれてしまつた。上衣は頸の邊にもつれ、……

……。このときキリイム・イワアノウキッチの激怒は正に頂點に達し、全身の血は逆上した。そして、彼女の肩と云はず、脊と云はず、足と云はず、所かまはず恐るべき速度をもつて亂打した。グラヒラは逃れやうとしたり、或は空手で僅かに體を覆ふと繰搔いたりしたが、彼女の抵抗はたゞ益々キリイム・イワアノウキッチをいきり立てるに役立つのみであつた。彼は狂憤に陷つた。そして最早何もわきまへず、思慮を失つてしまひ、たゞ調子にまかせて亂打するのみであつた。

その合間合間に妻の髪の毛を摑んで引きづり、自分の撲るに都合のいゝ狀態に戻す爲め膝頭で蹶つ飛ばした。やゝ暫しの間はたゞ彼の咽喉を絞つて出る吐息と、

風を切る鞭の打撃の音と、重々しいどさくさした物音が聞えるのみであつた。しかし血が床の上に飛び散つたとき、グラヒラは終に飛び出し、鋭い金切聲を絞つて悲鳴を上げた。彼女は狂亂したかのごとく藻掻き、起つき倒れつ、キリイム・イアアノウキッチの手や足に縋り付き、革鞭を捉え、さては自分の暴君に接吻をさへ試みた。が、總ては無益に終つた。

彼女の悲鳴は家中に、更に屋外にまでも傳つたのであるが、誰一人として拘はらうとするものはなかつた。彼等はこのことの在るのは當然のことゝして考へてゐたのである。

終に悲鳴は粗暴な、連續した叫喚とかはり、突然欷んでしまつた。キリイム・イワアノウキッチは妻の髪の毛を掴んでゐた手を放し、彼女の顔を膝頭で蹶飛した。打倒れたグラヒラは、體を廻し、俯伏となつた。斯くして一先は納つた。彼女の全身は慄え、そして足は痙攣的に縮まつた。

キリイム・イワアノウキッチは恰も火でも着けられたかの様に、荒々しい重苦しい呼吸をした。その顔は赤黒く、猛惡になつてゐた。妻の方には目をくれず、彼は洗面所の方に歩み寄り、手拭をとつて顔や頸を洗ひ、栓に口をつけて、腹一杯水を飲んだ。初めてどうやら少しは落ち着いて來たらしかつた。そこで寢臺に腰を下し長靴を脱いだ。

グラヒラは依然として、横はつたまゝ顔を床に押しつけ、片手で頭をかゝへ、他の手は妙な工合に捻つて、横の方に投げ出してゐた。その手の全體は僅かに動き、負傷した箇所に觸れやうとしてゐるらしかつたが、力なく垂れてしまつた。グラヒラは全身を慄はし噎ぶ樣に啜り泣いた。

キリイム・イワアノウキッチは長靴を脱き、ズボンをとつて横たはつた。一時默してゐた後に彼は言つた。

『いゝ氣味だ！　少しや目も醒めたらう！　ランプを消せ、そこらで愚圖付い

てゐるこたあないんだ！』

グラヒラは彼の言に應じなかつた。

『俺の言つて居ることが解らんのか？　寢ろと云つたら寢ろ！』彼は躍起となつてかう怒鳴りつけ、體を持上げた。

グラヒラは吐息しながら床に兩手を突張つて體を起し立てたが、一旦力なく倒れた後やつとのことでよろめき、全身をワナワナ慄はしながら立ち上つた。腫れ上つた彼女の顔は、解け亂れた髪の毛が縺れかかり、汗に濕んでゐた。彼女は怪しげにふらふらと歩き出した。まるであたりの何ものも目には留らないかの樣に。

（以下二十一行削除）

九

ザアハルは一人農舍に住つてゐた。

周圍は乾燥した塵埃多い荒野によつて繞られ、遠い地平線の彼方は燻つた樣に茫莫としてゐた。農舍の邸内にあるみすぼらしい一かたまりの木立の外には、見渡す限り何一つ目に觸れる青いものはなかつた。そして灼熱の陽を受けて人參色になつた草の上空、紫色にかすんだ中を飢えた鷹が哀れな聲を出しながら圓を畫いてゐるのみだつた。ひどい旱魃つゞきで地面には割目が出來、夜毎に空一面は血の樣な夕燒で物凄く顫えた。

ザアハルは煩悶と孤獨の淋しさの爲めに、體も痩せ衰へて來た。

彼は、家庭の方はどんな工合になつてゐるか全然知ることは出來なかつた。町からは勞働者も見えはしたが、彼は流石に氣恥しさを感じ、彼等に家庭の樣子を尋ねる勇氣もなかつた。勞働者達も又、そのことに就ては一言も口にしなかつた。で、彼としては尠くも、萬事は圓滿におさまつたものと推則した。彼は最早、グラヒラは、自分にとつては永久に失はれたものであると云ふことをよく知つて居り、そしてそのことは既に、斷念さえしてゐたのであつた。で若し、キリイム・イワアノウキッチが實際に彼女を殺してさえくれゝば、彼としては寧ろ氣が樂になることが出來たかも知れなかつた。が、今彼等が仲直りをして、再び夫婦として暮してゐると云ふことを想像することは、彼にしては居ても立つても堪えられない程の嫉妬の苦痛を覺えることであつた。それでも日中は仕事にかこつけて、どうにかこうにか氣をまぎらかすことも出來たが、黄昏時や乃至は夜、あたりが

靜まりかへつて來ると、彼は農舍の中に全くの孤獨となつて殘され、どうしてよいものやら、殆んど爲すべきところを知らなかつた。彼がランプを消して寢やうとするや否や、彼の目の前の暗闇の中には、以前にも增した美しく、妖艶な、蠱惑的なグラヒラの姿が浮び出し、彼の全肉體は、彼女に對する慾求で緊張し、劣情の念が頭に込み上つてくるのであつた。

彼はときに、正體もなく醉ひつぶれて見たいと思ひ、あるときは修道院に這入り込まふと思ひ、またあるときは、いつそのこと、キリイム・イワアノウキッチを殺してしまひたいと思つた。この最後の突飛な想像は、熱した彼の腦裡に休まることはなかつた。彼は夢の中に偶々、キリイム・イワアノウキッチの太つた腹、銃口、火と煙、そして最後には血を見た。不思議なことに、その際、いつも決して兄の顔を見たことはなかつた。しかし、そのことが、どう云ふものか特に彼には惱しかつた。またときとしては烈しい殺意が潮のやうに心に迫り、あと僅か一

歩の衝動によつて、事は決行されると思はれる程度にまで彼の心は熱したのであつた。彼がかうした恐ろしい惡夢に襲はれるのは多く夜半のことであつた。すると彼は跳ね起きて、あたふたと着物を着て戸外に飛び出し、朝になる迄農場の中を彷徨するのであつた。主人を見覺えてゐる犬共は尾を振りながら彼の後に從つた。一方の曠野の中は、そこは永久に晝のない夜のやうに思はれる程、黑々として物凄かつた。

それから一週間を過ぎたある日、年老いた馭者がやつて來て、ザアハルに其後家庭内に起つた一際のことを話した。彼は老馭者の口から、キリイム・イワアノウキッチがグラヒラに折檻を加へたとき、彼女の悲鳴は『恰も傷けられた豚の樣だつた』と聞かされたとき、思はず毛髪の根本が動き、硬くこはばつた自分の顏面を、粘着く蜘蛛か何かゞ匍ひ上る樣な氣がして、眼はくらくらつとして眞暗くるのを感じた。

しかしなほ馭者の口から、彼等も現在は仲直りをして、ことなく暮してゐると聞いたとき、ザアハルはたゞにキリイム・イワアノウキッチのみならず、グラヒラまでも共に殺してしまひたいと思つた。

『知れ切つた事だ！　何と云つたつて女は女だ。女と云ふ奴あ！　少し手痛いことさえ見せりあ！　直き我を折つてしまふと云ふ譯で、弱いものなんだ！　どの女だつて皆んなそんなものだ！』かう言つた馭者の言はザアハルには眞當の事の樣に思はれ、矢張りグラヒラにとつては、實は彼自身であらうと夫であらうと――同じことなんだと考へられた。

老馭者の物語りは殆ど堪え得ないまでに彼を苦しめた。彼の心中は燃え立ち、切りきざまれ、燒きつけられる思ひであつた。が、それでも彼はなほ、馭者の話しがもつともつと際限もなく續けられてくれゝばいゝと心に願つた。彼はたゞグラヒラのことのみが問題であつたが、それでも禮儀上母親のことなぞ尋ねない譯

にもゆかなかつた。

『ときにおつかさんはどんな風かね？』

馭者はきつとなつて、

『そのお姆さんなんですがね――全くそりあ！　苦り切つて居りますよ。まあ！　考へてもごらんなさい。あんまり世間へ顔出しも出來ますまいよ！　近頃ぢあ、世間でもあの人達をよくは云はねえでございます。お姆さんは、以前からあんたにあ、つらく當つてますがね――まあ、後になりあ、なんでもなくなりませう――兎に角、何と云つたつて、自分の息子さあね。生みの親の心つて云ふものは亦格別なんですからな。時にザアハル・イワアノウキッチ！　あなたを思つて泣いてゐる人間がありますよ！――（突然馭者は笑ひ出し）――ビヨオテニカさ！　此頃どうやら少し痩せて來たがね！　本當なんで！「ムウー、ムウー」――（馭者は口眞似をしてみせ）――とね、そりあ！　あんたに一生懸命なんです。こんなこ

つて云ふなあ、まあ、滅多にないことですよ！　馬鹿が人並に慕ふなんて――』

馭者は七杯目の茶を飲み干し、コップを倒にして、その底の方に嚼り殘しの砂糖屑をのせ、立ち上りながら、

『澤山御馳走になりました。ちやあお休みなさい』と別れを告げた。

ザアハルはもつと彼を引き留めて置きたかつたのだが、躊躇してゐた。

馭者は天井下の隅に掛けてある聖像に向つて十字を切り、彼に向つて今一度頭を下げて出て行かうとしたが、戸口のところで立ち留り、

『だが、お淋しいことでござんせう！　こんな處で――一人ぼつちで――わしあ！　あんたに鐵砲を持つて來てお上げしりあよかたんで。そう思ふことは思つたんですが――では孰れまた――』

馭者はとうとう出て行つてしまつた。そこでザアハルも外に出た。そして帽子も被らず、彼は悄々と暗い曠野に向つて歩いて行つた。

『人殺し！　人殺し！　人殺し！』それは彼の腦天を槌でどやしつける思ひであつた。

翌朝になつて彼は漸く、疲れはて、埃だらけの姿となつて家に戻つて來た。彼の眼はどんよりとし、顏は死人のやうに靑ざめてゐた　牛の乳を搾りに來た女が彼の姿に目を留めて、

『まあ、ザアハル・イワアノウキッチさん。あんた、お休みにならなかつた樣ですね！　おからだの爲めによくないことですよ！』

ザアハルは一言をも返さず、たゞ何かに吃驚りさせられたかのやうに、妙に顏を横に背けた。彼は一目でそれを感ずかれる程、氣をとり亂してゐた。働き女は彼の通り過ぎた後を見送り頭を振り、『あの人は、餘程どうかしてゐる』と一人考へた。

しかもその前夜、次の樣な事件が突發したのであつた。――グラヒヲは既に枕に

就いてゐたが、キリイム・イワアノウキッチは襯衣の上に汚ないズボン吊をして邸園に面した窓を締めてゐた。その夜はとても我慢の出來ない程の暑苦しさであつたが、ヂイキイの家庭では、昔からの家風として、盜難の恐れがあると云ふ理由から、窓を開け放したまゝ寢るなどゝ云ふことは許されてないことであつた。

屋外は眞の闇に包まれ、空を背景に立ち上つた屋根や樹木の形さえもが殆んど見分けがつかない程であつた。澤山の星は見えてはゐたが、しかしそれは、輝きのない、鈍い光であつた。窓に接近した部分の木の葉は、窓から漏れるあかりを受けて、暗闇の中に神秘的な綠の色を照り返してゐた。家から數歩の距離のところに立てられた庭柱が朦朧と白く見えた。紫色の電光が閃く、と、その瞬間、空はパット明くなり、立樹は物凄い黑い影を見せた。が、次の瞬間、萬象は再び暗黑の闇の中に姿を消した。

『夕立がやつて來るわい！』とキリイム・イワアノウキッチは一人呟いた。

しかも丁度この瞬間である。耳をつん裂く様な爆音が大氣を破つて窓硝子を震動した。發砲の閃光とともに、草叢に取り圍まれてゐる一ばん近くの木立の中に銃身が閃き、そして白い庭柱の一方を過ぎる誰かの影が見えた。

キリイム・イワアノウキッチは、誰かゞ恐ろしい力を持つて自分の胸を突き、ある熱い息が顔に煽りつけられたかのやうな氣持ちがした。銃聲は既に彼の耳には這入らなかつた。意識を失つた彼は、二歩ばかり後退りしたかと思ふと、どつさりと床の上に打ち倒れ、兩手を伸ばして、自分の上衣の掛けてある椅子を引き倒した。

彼は倒れんとする瞬間、絶望的に『ザ――』と叫んだ。

忽ちにして彼の顔は平和な、無感覺な表情と變つた。そして彼は二度ばかり全身を捻り、太つた腹を下にして軀を持ち上げたかと思ふと、それきり動かなくなつてしまつた。その左肩に片寄つた邊の、引き裂かれた更紗のシャツを滲み通し

て黒血が流れた。

餘りの出來ごとに膽を潰したグラヒラは、寢床から跳ね起き、戸口に駈け寄り、聲をかぎりに全切聲をはり上げた。彼女の叫び聲を耳にするを合圖に、家中のものは一聲に起きて、物々しい聲をたてながら駈けつけた。犬は吠え出した。

十

ヂイキイ家に傳はるドラマは、既に久しい以前から全町中の話題の種になつてゐたが、今、更にまた、キリイム・イワアノウキッチの變死しだことの事實を加へて、彼等の興味は愈々その絶頂にまでそゝり上げられた。

しかしこの殺人事件には、何等の訝疑の餘地はなかつた。輿論は期せずして、ザアハルが當の下手人であることに一致確定した。

その翌日、ザアハルは拘引され、收監された。

あらゆる證據が提示された。即ちザアハルの所持する二連銃（それには發火して空になつたケースが嵌つてをり、銃口にはまだ新らしい火藥の汚れがついてゐた）が窓から數歩の草叢の中で發見された。そして勞働者共は異口同音に、ザアハルが例の兄弟喧嘩の際、キリイム・イワアノウキッチが射たうとしたこと、並にそのとき居合せた一同のものが總がかりで、彼から鐵砲を取り上げたとき、彼はきつと射ち殺して見せると云つていきり立ち、『犬畜生を射ち殺してやるんだ』と威嚇したことを證言した。

女中は農舍から、ザアハルはその當夜は徹宵家を留守にして、どこか餘程遠方に行つて來た樣子で、朝になつて漸く戻つて來たが、彼はすつかり泥まみれになつてゐて、その上疲勞し切つて見え、いちぢるしく『心を取り亂してゐた』と云ふことを訴えて出た。

『あの人は、いつもわたしには何となく警戒をしてゐらつしやいますので、あの時はわたしには何一言もおつしやいませんでした。わたしそのとき、一目であ

の人が兄さんを殺したに違ひないと云ふことを見てとりました』と、この元氣のいゝ別嬪さんはべらべらと喋つた。

最後に老馭者は、不本意ながらも、その當日の夕刻、ザアハルが兄のこと及びグラヒラのことに就て色々と彼に尋ねたと云ふこと、そしてそのときザアハルはまるで顏色を失つてゐたと云ふことを白狀して、次のやうなことを付け加へて言つた。

『わしあ！　もう以前から、あの人にそう言つてゐたんです。「ザアハル・ワヌイチ（イワアノウキッチのこと）お前さんあんな女にや唾でも吐きかけておやんなせい！　廣いこの娑婆にや！　女なんかいくらでも居りまさあ！　どの女だつて、女は女なんで――と、わしあ、言ふて置きもしましたが――だが、なかなか口で云ふ樣にあ！　行かねえと見えて――あの人も、あの女の爲めにあ、心を奪はれて居りなすつた。大體のことの起りと云ふのがそこから出てゐるんで――毒

蛇の畜生め！　男一匹をだいなしにしやあがつた！』

審査の項目中でも、特に重要なものとして數へられてゐる一つが、問題となつた。それはキリイム・イワアノウキッチが死に先だつて發した「叫び」の問題に就てゞあつた。

彼の叫び聲、もつと正確に言ひ表すなれば、彼の絶望の悲鳴は家中に響き渡り、多數のものがそれを耳にしたのである。そのときは母親は未だ寢床に就いては居らず、女コックは食堂で片付け仕事をして居り、勞働者は臺所で晩食中であり、小間使の小娘は廊下に夜具をのべてゐたし、そして門の蔭のベンチには、他の娘の一人が意中の軍人と腰掛けてゐたのであつた。彼等は皆、キリイム・イワアノウキッチが明確に『ザアハル』と叫んだと云ふことを確信的に主張した。

しかるに、こゝに本事件に對しては一ばんの直接證人であるところのグラヒラ（彼女は其後あらゆる虐待を受けてひどく衰弱した）だけが、彼等に對して反對

の證言を主張した。卽ち彼女の言ふところによると、キリイム・イワアノウキッチは單に『ザア！――』と叫んだのみであつたと云ふことであつた。なほ彼女の意見に據ると、被害者の言はふとしたことは『ザ、チトウ(どうした譯なんだ？)』とのことであつた。

だが、こうした推測は、第三者から見れば、それは勿論グラヒラが……を辯護せやうとして編み出した、甚だこぢつけ的な說明であり、全然根據のないものとしか受けとれなかつた。彼女が夫を愛してゐなかつたことは衆知の事實であり、殊に彼女の姦通したことが發覺して以來と云ふもの、キリイム・イワアノウキッチは、何度となく彼女を打つたり、折檻したりした。そしてその上に、彼女に對して無理にも妻たるものゝ務を果すことを强いたのであつた。しかるに彼女がザアハルに對する態度はとみると、彼が農舍から拘引されたその日の中にも彼女は彼の獄舍に走つた程であつた。

さて當のザアハルはと見ると、彼は人目にそれと氣づかれる程いちゞるしく心の動搖を來たしてをり、『私は兄を殺しません』と、たゞその一言を繰返すのみであつた。

彼の所持の鐵砲が、兇行の場所に發見されたのはどう云ふ譯であるか？　との審問に對し、彼はそれはどう云ふ譯か知らないと答へ、そして、

『私は鐵砲は家に置き忘れたんです――私の手許には鐵砲はなかつたのです』と云つた。これは、後になつて、馭者のマッエイが、記憶から想ひ出したことではあるが、彼の記憶によると、鐵砲は被告の言ふ通り、それは實際家に置き忘れて行つたものであり、ザアハルが非常に狩獵が好きであることを知つてゐた彼は、ザアハルが野原の一軒家で一人淋しがつてゐることを想像して、自分が農舍へ出掛ける際、鐵砲も一緒に持つて行つてやらうかと思つた、とのことだつた。

しかし氣の毒なことにこの肝腎な事情も、その場では彼の頭に浮んではこなか

つた。そして、ザアハルに對する彼の同情がいよいよ切になつて來た結果、漸く氣付いた頃は審問も既に終つた後になつてからのことなので、切角の彼の證言も特別の效果を納めることは出來なかつた。

最も重要な問題――彼が罪に問はれんとしつゝあるその運命の當夜、彼がいづれに行つてゐたか――に對して彼の答へるところは僅かに、次の如くであつた。

『原の中を歩いてゐました。』

『夜通し歩いてゐたと云ふのですか』と豫審判事は問ふた。

『夜通しです』とザアハルは外見いかにも確信のないもの丶樣に繰り返した。

『どう云ふ目的で、あなたはそんなに夜通し歩き廻つてゐたのです?』

『目的はなかつたのです――たゞ歩き廻つただけなのです――私は非常に氣分が面白くなかつたのです。』

誰にでもそれと氣付かれるやうに、ザアハルの答辯は多くの場合に於て、彼が

自分自身を辯解するのを望んででもゐないかの樣であつた。しかし彼は、自分が兄殺しの眞の下手人であるとされたとき、始じめて奮然として、心からの恐怖と嫌惡とを懷いて辯明に努めた。より正確に言ひ表すならば、彼は假令如何なる事實が存在しやうとも、彼は、兄殺しの下手人と云ふやうなそんな恐ろしい罪を被せられることに對しては、斷じて我慢が出來ないかのやうであり、しかしそれと同時に、彼は、彼自身の運命に對しては徹底的に冷淡であるかのやうに見えた。

事件參考人中の大部分の者の、この事件に對する態度には、豫審判事も多少意外に思はせられた　彼等は各自問はれるまゝに、誠實に申し立てをした、が、どう云ふ譯か、彼等の誰も彼もが、自分の意見と云ふものを口外することを何となく恐れてゐるかのやうであつた。そしてその點に至つては、グラヒラや母親でさへもがその通りで、特に目立つて被告を辯じてゐる樣子も見えなかつた。

その點は誰にも理解されやう筈もなく、それは後になつて檢事がその論告中に

指摘したところであつた。

こゝに特に奇體なことは母親の態度であつた。事件の起つた最初の瞬間には、彼女は狂亂したかのやうに息子の死骸に飛びついて、しかも人々の大勢集つて居る中で大聲に、犯人は確かにザアハルであつて、他の誰の仕業でもないと叫んだのであつた。そのことはその場に居合せた全部の人達のよく知つてゐることであつた。しかるに彼女は豫審判事の審問中、突然、がらりと態度を變へ、中途で默り込んでしまひ、最後には、一人の母としての眞情を披瀝して答辯をさえ全然拒んでしまつた。

しかしこのことは後になつて、檢事がその論告に利用するところとなつたのである。

要するにザアハルが殺したと云ふことに對しては、それが事實であるとして既に何人も疑ふものはなかつたのである。が實のところ、この殺人事件に對する一

般公衆の興味も、それが、グラヒラとザアハルの關係事件に比べると、さ程のものでもなかつた。

一般公衆の注目したことは次の樣な事情であつた。卽ち……

……彼等がなほ同棲するであらうか、それとも永久に離別するものであるか？　と云ふことに就てゞあつた。婦人連は、彼等は屹度同棲する樣になるであらうと主張し、男の側はその說を信じなかつた。婦人連の言ふ根據は、ザアハルが彼女の夫を殺したのは彼の熱烈な愛情の結果であると云ふのであるが、男子側はそれに答へて『おゝ、あなた方は未だあの社會の人間と云ふものを御存じないんです。彼等にとつてはそれは、實に許すべからざる罪惡なんです。あの男の亡きものとなつた今、彼等に殘されたたつた一つの途は修道院だけなんだ。孰れにしても今後……樣なことはありますまいよ』

ところが程なく一般の驚異に値することが知れ渡つた。と云ふのは、グラヒラが毎日獄舍を訪れるにもかゝはらず、ザアハルが頑として彼女との面會を拒絶しつゝあるといふことであつた。

『そうら、どうだね。彼は彼女を見るさへいやだと云つてゐるぢやないかね！』

と一方が誇らしげに言へば、

『ですけれども彼女は、相變らず足を運んでるぢやありませんか！』と他方側で反駁した。

『ときに彼女も、そうした女の一人なんだ。戀を懷いた女と云ふものは、どんな罪にだつて驚くものぢやないんだ。』

實際彼等の言ふ樣にグラヒラは、毎日かゝさず獄舍に通つた。色青ざめて、黑衣に身をつゝんだ美くしい彼女は、遇ふ人ごとに目を伏せて通り過ごした。彼女の手の中には牢の中の人に贈る爲めの、布で包んだ小さい包みものがいつも持た

れてゐた。彼女は獄舍の門外に根氣よく待ちつゞけた。そして最後にザアハルは面會を欲してはゐないと告げられたとき、彼女の顏は更に更に青ざめ、目を伏せたまゝ、その持つて來た包みを監視人に預けて默つて出て行くのであつた。しかし後にはそうした贈物も再び彼女は自分の手で持ち歸るか、さもなくばそれは、そのまゝ乞食にでもやつてしまふに過ぎなくなつた。ザアハルは突然そうした差入物さへも拒む樣になつて來たのである。

ヂイキイ家の家族としては、女二人と白痴のピヨオテニカが殘されたのみであつた。

話の次手にこの白痴のことに就ても、多少説明を加へて置かうと思ふ。ピヨオテニカは殺人事件の激動を受けた結果、どうやら多少聰明になつて來たかと思はれる樣なところがあつた。尠くとも彼の目の中にはある表情が認められる樣になり、その態度も落ち着き、まるで思慮のある人間らしくさえなつて來た。

キリイム・イワアノウキッチが殺されたとき、白痴は殆んど仰天してしまつたものと見え、家を飛び出して土藏の裏手の草叢の中に身を隱した。そして三日目の夕方に漸く彼をその場所に發見したとき、彼はすつかり飢え切つてをり、そして土塗れになつた彼の樣子は、さながらの野獸であつた。彼はどうなだめても、いつかな、その隱場所を離れやうとしなかつた。皆のものが彼をその場所から無理にも曳き摺り出さうとしたとき、彼は狂亂して暴れ叫んだ。最後に一つの詭計を弄して漸くのことに、彼をその場所からおびき出した。その手段として、五十錢玉一つをやると云ふ約束で、顏立ちのいゝ日傭娘の一人をその場所に派遣したのであつた。

兄の葬式中坊さんが來て、香を燒き、そして家の中に鼻聲のとり亂れた讃美歌が響いたとき、ピョオテニカは家を拔け出し再び妻を隱してしまつた。

『どうです皆さん！　呆れたことぢやありませんか。馬鹿でも矢張り死は怖いも

のと思はれますね』と老助祭は白痴の身を隱した原因に就いてかう說明を加えた。

キリイム・イワアノウキッチは、クラドビシチエンスク街を通つて墓所に運ばれて行つた。またも弔の鐘が鳴り渡つた。曾つて彼が新妻を伴つて、町に向つて通つて來たその日と同じ樣に。

そのときの新妻は今彼を葬つて、家庭內の唯一の女主人となつたのである。それにつけて一般にとつて不審でならないことは、當初から嫁を嫌つてゐたが、彼女が夫を裏切つてからと云ふものは、彼女に對して烈しい憎惡を向け、絕えず息子を唆かして彼女を拷問せしめた——その母親が、キリイム・イワアノウキッチの死後、突然態度を一變して彼女と仲直りをし、仕事の一切をさえ彼女の手に引き渡してしまつたのである。

一方グラヒラにしてもまた、年老いた姑に對して、生みの母親に對するやうに萬事尊敬と愛情とを示し、そうした彼女等の關係は、やがて眞の愛情に基いたも

のにまでなつて來た。彼女等は偶々一緒に教會に行き、そして二人とも儀式の終るまで悼まし氣な、嚴かな靑ざめた顏を並べて彳みつゞけた。次手ながら附言して置くが、あの若く美くしいグラヒラの顏にこのとき以來、どうやら母親のそれのやうな聖像畫的の俤が浮んで來たとのことであつた。

一方の息子を墓場に送り、他方の息子を獄舍に奪はれてからと云ふもの母親は一度に年老いて、すつかり氣を落してしまつた。仕事から全然身を退けた母親はたゞ教會詣りと追善供養と、貧乏人に施しするのがせめてもの氣慰めであつた。そして彼女は家に居る間はたゞ自分の部屋に坐りつゞけ、食事もそこですますのであつた。家政のことから、製油場及び農場のことに涉つて、グラヒラは自身萬端切りまはしをつけていつた。而かも驚くことに、彼女はそれ等の悉くに對して優れたる實際的の才幹と、强固なる意志とを持つて臨み、立派に女主人としての働きを示した。

最初の程は全體の人達が彼女を指して『……』だの『……』だのと云つて誰も彼女の命になど應じるものはなかつた。勞働者はすこしも働かうとはせず、娘共は巫山戲、女コックは脹れ面をして、勘定ばかりせがむ樣な始末で、家中はさながら無政府狀態であつた。しかるに次の週の終る頃には、グラヒラは既にどうにかこうにか努力して全部のものを手中に收攬することに成功し、彼等をして默つて彼女の命に從はせるやうにした。そしてやがては彼等は彼女を尊敬する樣にさえなつた。『男優りの女ですよ！　勿論あゝしたこともあつたさ、しかしそりあ！胡蝶の犯した罪と云ふもんだ。何と云つたつて、惡魔にやあ勝たれんからね——だが一體、罪のないどんな人間があるんだ？　みんな同じ人間ぢやないかね！なんのかんのと云ふけれど、結極のところ、若しあの女が今日居なかつたら、それこそあの一家も今頃は滅茶苦茶さ。それに十萬圓からの財產が積んでゐると云ふにさ』とは、彼女に就て市場の人達の口にするところであつた。

ヂイキイ家の不幸を耳にしたグラヒラの父親は、別に力になつてやらうと云ふ目的でもなければ、と云つて、甘い汁にありつかうと云ふ譯でもなく、ぶらつとやつて來た。彼は近時完全のアルコホル中毒者となり、獨身者となり、そして方々の市場で喧嘩をふつかけたり、泥坊だと云つて、百姓達からこつぴどく撲りつけられたりすることがしばしばであつた。グラヒラは叮嚀に彼を迎えはしたが、仕事のことに就ては斷じて彼に容喙を許さなかつた。

『いゝえ、いゝんですから、おとつつあん引込んでゐて頂戴！　わたし自分でやるんですから。一際を身に引受けて、そして主婦として立つて行かねばなりません。みんな私の責任なんですから。』

老人は立腹して、行つてしまつた。

公判の日が愈々切迫してきたので、グラヒラは縣廳所在地の市に出掛け、ザアハルの爲めに莫大な金を投じて、最も名望ある辯護士を招聘した。このことは勿

論母親とも相談の上のことであつた。が町内では、こうした彼女の行爲を非難して、次の樣な噂を立てるものさえあつた。

『婆さんもどうやら惡錄したが、それにしても素てつこいのはあの女だ。全部の財産を自分の手に掻き集めやあがつて――今に見てゐるがいゝ、ザアハルでも出獄すりや！　それこそ二人で全部の財産を根こそぎかつさらつて仕舞ふんだから』

こゝに奇體なことは、町中全部の人々が、ザアハルの罪業を信じて疑はないのに市場の仲間のもの丈けは反對に、ザアハルの無罪を固く信じてゐたのである。

この地方の有識者連中は、彼等のこの矛盾的な見地をどうしても了解することは出來なかつたが、一方老いた淳朴な商人達は、自分達の考察を正しいものとして讓らなかつた。それは彼等が恰もある何等かの眞相をつかんでゐるかの樣に沈默を持して、人からその理由を尋ねられる樣な場合にも、たゞ僅かに『孰れ後になれば解ることだ』と答へるのみであつた。

十一

ザアハルの公判は大齊期の當日開廷されることになつた。適々雪の解けかゝつた折柄で、畑地は大きな透明な水溜りで蔽はれ、夜になると烈しい濕氣を含んだ風が吹いた。町に於ては終日、懺悔と告白の式を告げる鐘が鳴りつゞけた。

裁判の開廷された場所は地方自治會館の大廣間で、そこには厚く出つ張つた金枠に納めて掲げられた皇帝の肖像と、金の房のある赤い羅紗で覆はれた長いテエブルが控えられてあつた。

公判を傍聽しやうと集つて來た群集の數は、大したものであつた。郡下の婦人

と云ふ婦人は悉く、性慾と戀愛、嫉妬と叛逆とに基いたこの興味ある裁判を傍聽しやうとして押しかけて來た。しかし彼女等にとつて主なる目的は、噂の主人公を見ると云ふことであつた。一般にザアハルは好男子の上に、ダラヒラは絶世の美人であるとの評判であつたからである。

場内は全く人で充滿し、婦人連のおめかしと、將校連の軍服、役人連のフロックで雜然たる色彩を放つてゐた。後方の列には商人側の連中がきちんと座を占めてゐた。しかし一般の百姓の姿は一人も見えなかつたが、それは場所の關係で、總ての希望者を悉く容れる丈けの席がないので、傍聽券の所持者に限り入場を許したのであつたが、しかしそこには多くの奸策や、侮辱や、爭論、乃至は苦々しい不公平な處罰等を包含した、珍妙な現豫のあつたことは云ふ迄もないことである。

場内は恐ろしいどよめきに滿ち、轟音が絶え間なく續いた。無罪主張派と有罪

主張派とが互に讓らず、殆んど裁判の開廷される間ぎは迄も火の樣になつて口論し合つた。その爲め大切な『裁判を開廷します』と云ふ言葉さえ、全部のものが聽きとることが出來なかつた程である。で、裁判官連は、逆浪の樣な騷ぎが徐々に靜まるのを待つて、それぞれの席に着いたのであつた。しかし、やがて總ては落ち着き、場内は水をうつた樣に靜肅さになつた。

『被告の着席！』が告げられた。

氣の毒なことに、傍聽人は開廷の最初の一歩に於て興味の中心をそがれた。と云のは他でもなく、グラヒラの出廷がなかつた上に、一方ザアハルは商人階級の目にこそさまで見苦しくはなかつたと云ふものゝ、しかし獄舍に居た間に彼は傷ましい程衰弱して、皮膚の色艶は失せ、髯は生えのびてゐたのであつた。そして全體の審問に對しても彼は眼を伏せたまゝ、恰も氣拔けしたものゝ樣に曖昧に、物憂げに答えるのであつた。

婦人連の間には既に我儘な不平のどよめきが傳つた。そして終には全體のものの注意が、遠來の辯護士の方へ集中される樣になつた。

その辯護士と云ふのは縣下に聞えた名望家であつて、かうした知名の士が曾つてこの町に訪れたことはなく、恐らく開闢以來のことゝ想像せねばなるまい。

辯護士はやゝ白くなりかけた髯と、秀美な、そして聰明な眼を持つた、典型的の紳士であつた。彼にはある妙な癖がある風に思はれた。彼は恰も、絶えず敏速にあらゆる周圍のものを嗅ぎつけるもののやうに、ときどき鼻を動めかした。そのもの言ふ語調の中には非常なる自信が籠つてをり、打ち解けてさえゐた。そして、その聲はいかにも氣持ちよかつた。

裁判の最初の場面——犯行の經過、證人の誓言、及び審問——は紋切的のもので興味はなかつた。證人と云ふのは、いづれも低級な人物であり、その申し立てるところも一般に判り切つたこと以外ではなかつた。

先づ大體に於て、告訴と證人の訊問によつて示されたこの場の光景に於ては、無罪派側がやゝもすれば赤面をすると云ふ形成であつた。こゝまでは總ては寔に平凡な判り切つたことであり、ザアハルが兄を殺したと云ふことも、豫審手續が豫定の結果通りの紋切形の正式な順序に變つたまでのことで、いづれも豫期された明かなことに過ぎなかつた。

傍聽人は今にも兩流の大激論が始ることを豫期して多少活氣付いて來たが、より一層彼等の興味を煽つたのは、今に掴み合ひでも始まるかも知れないと云ふことであつた。即ち云ふ迄もなく、彼等は有名な辯護士の辯論を期待したのであつたが、彼等の期待を裏切つて、それよりは檢事の論告が遙かに見ものであるかの樣に思はれた。

また實際に遠來の辯護士は、證人に對する訊問に於て特別の技倆を發揮しなかつた。即ち彼はごく月並な筆法を辿り、皮肉的な論法に據て證人達の證言の確實

性を顚覆させやうと努めたのであつた。

一例を上げてみるならば、出しやばりで口達者の農舍附の女コックに對する彼の訊問は次の樣であつた。

『――なる程、では證人としてのあなたのおつしやるところに據りますと、あなたは、そのとき被告を一目見て直ぐに、彼が兄を殺したと云ふことを見てとつた、と、こうおつしやるんですね！』

『そうなんです。私一目でそうと見てとりました。』

『では被告の顏に、何か人殺しをしたと云ふ「特別な表情」があつたと云ふ譯なんですか？』

『そりあ！　勿論のことです』と女は平然と答へた。

『あなたは骨相術には餘程の大家でゐらつしやるんですね!?』と辯護士はさも感心顏を見せ『では兎も角も私共の爲めに一つあなたの御說明を願ひたいんです

が？　一體兄を殺したと云ふ人はどんな顏付をしてゐるものなんでせう？』

女は答辯に困つて默つてゐた。

『え、と、只今あなたは被告はいつも、あなたに對しては特別に何か用心深くしてゐたとかおつしやつた樣でしたが……その特別な用心深い表情の中には、特にどう云ふことが暗示されてゐたでせうか？』

女はちらと辯護士を眺め、次に傍聽席の方を横目で見て、顏を赧めた。傍聽席にはかすかに笑聲が聞えた。

『あなたのおつしやる處によると、被告はそのとき通常とは違つて、殊更にあなたに親切さを示さなかつたとのことなんですが――』と辯護士は弄ぶ樣な調子で更につゞけた。『だがあなたは特別な何を彼に對してお求めになつたんです？　彼があなたを抓つてくれればいいと、そんなことぢやあなかつたんですか？』

傍聽席の間にはクスクス笑ふ聲が聞えた。

辯護士は萬事かうした筆法で、終始訊問を繼續して來たのであるが、鐵砲の問題になつて來たとき始めて愼重な態度を示した。

證人の申し立てによると、鐵砲は例の夜中に兄弟同志の格鬪の際被告から取り上げたことになつてゐたが、しかし、其後鐵砲の始末はどうなつたか誰も心當りはなかつた。

『間違はない。女コックが戸棚の中に隱してしまつたんだ』と勞働者の一人が口走つた。

辯護士はそのことに言掛りをつけ、あらゆる努力したにも係らず、この事實は適當の根據を以つて確定することは出來なかつた。しかし假令實證こそは上げることは出來ない迄も、若し假りに鐵砲が中棚の中に實際に置いてあつたものとすれば、ザアハルは如何に努力しても、人に氣付かれない樣にそれを持ち出すことは出來ない筈であつた。と云ふことは判り切つたことであつた。卽ちその戸棚に

接近する爲めには、いやでも勞働者達が晩食してゐる臺所を通るか、でなければ廊下を通らなければならないのだが、其處ではその時刻頃小間使の娘が寢床を敷いてをり、それに近くの母親の部屋のドアーは開かれてゐて、母親は未だ寢てはゐなかつたのである。

非常に時間を費して詳細に審査したことは、ザアハルが徒歩で町に到着し、その足で直ちに引き返し、夜明の時刻までに農舍に戻ることが出來たか、どうかの問題であつた。

『都合七時間で歩き終つたことになる――』と辯護士は數え上げた。同時に聽衆中の多數のものも指を折つて時間を數えた。『町までの道程が二十六露里として――往復では五十二露里になる譯である。そこで假りに鐵砲を手に入れて、犧牲者を待ち伏せしてゐた時間を計算に加へないとしても、被告は一時間に八露里と云ふ速力で休みなしに駈け通したことになるが……この速力と云ふものは、餘り

惡くない百姓馬の疾走速力に相等する。だが馬でさえ、五十二露里を駈け通すと云ふことは不可能なことであると云はなければならない。』

これは反對者に對する巧妙な駁論であり、從つてそれが一般聽衆のものに與えた反響もいちゞるしいものであり、裁判官連さへ顏を見合せた程であつた。

ザアハル黨のものはすつかり悅に入つた。それに引きかへ、商人のミロスラフスキイを筆頭に、陪審官連だけは意氣消沈の態であつた。

氣の毒なことに亦もや、老馭者が切角の雰圍氣を壞してしまつた。

『二十六露里と云ふなあ、少し數へ過ぎまさあ。そいつは廻り途の事で……そのかはり淺瀨を渡つて眞直の道を行けあ、十八露里もどうだか？……わしやこの足で幾度か歩いてますだ。』

檢事はこの事實を捉えて、次の點に陪審官の注意を促した。

卽ち、心が悶々の中に紛亂してゐた當時のザアハルは馭者の物語りによつて、自

分の戀人が拷問の苦しみに陷つてゐることを知り、極度の神經の興奮狀態に陷つたのであり、その爲め或は全道程を走り通したと云ふこともあり得べきことである。馭者の云ふ方向に路を擇べば——亦それに違はないが——いやでも耕地、小沼地、小河の淺瀨を通らねばならないのである。ザアハルがひどく土塗れになり、疲れ切つて歸つて來たのはその邊の事實を裏づけるに足る何よりの證據である。

一際の顚末がそれからそれと明白に眼前に浮ぶ樣な氣がして、聽衆中の多くのものは、彼が闇の夜に頭髮を亂し、眼は血走り、怨恨の情に心亂れ、阿修羅の樣に野を過ぎ、沼を過ぎて駈け行く、兄殺しの彼の當時の有樣を眼前に髣髴せしめた。

道程に就ての問題は假令辯變士が、先づその近路に就ては未だ何人も實測したものではないこと、次に假りにこの往復の道距が三十六露里にしてみたところでこの道距を尠くとも考量するならば『兇行のあつたのは十一時である。してみる

と被告は町まで實に二時間で駈けつけたと做さなねばならない——』そんな短時間の中に、馬でない人間が休みなしに走るなどゝと云ふことは到底出來得べきことではない、と云ふことを論じてもみたが、結極彼の說は葬られてしまつた。

問題が、キリイム・イワアノウキッチが死の刹那の叫んだことは何を意味するものであるか？　と云ふことに移つたとき、證人達は、彼はザアハルの名を叫んだのであると繰返した。

『御婦人の證人、あなたにお尋ねしますが、あなたも鐵砲の音をお聞きになつたとき、非常に吃驚なすつたんでせうね』辯護士は、殊更に女コックに訊ねた。

『吃驚したどころの騷ぎぢやありません。私し目がくらんで——そのとき手に持つてゐた皿を思はずおつことしてしまひました。』

『ところで、そのときどんなことをあなたは一ばん最初に考へました？』

『ザアハル・イワアノウキッチさんが、キリイム・イワアノウキッチさんを殺

したんだ、とそう思ひました。』

『そのとき直ぐにさう思ひになつたのですか？』

『直ぐにですとも、まるで、そうね、わたしに光りものでも來た樣に、すぐにそう思ひました。』

『それは叫び聲を聞きつけたよりも、もつと早くでしたか？』

『もつと早くでした。』

廊下に寢てゐた娘は實際に馬鹿であることが知れてゐたので、彼女からはたゞ、

『大へん喫驚した』と云ふことより以外知ることは出來なかつた。

『どうしてあなたは、キリイム・イワアノウキッチが弟の名を叫んだ、とお考へですか？』と辯護士は、その時刻に門の蔭のベンチに、その戀人の軍人と一緒に腰掛け居た娘の一人に訊ねてみた。

『皆がそう云ひますから、で私もそう思ふのでございます。』

彼等の仲間中でも最年長者であり、賢い一人の勞働者に向つて辯護士は次の樣な質問を試みた。

『證人はどう思ひますか？　キリイム・イワアノウキッチは武る危險が弟の方から自分に迫つて來つゝあると云ふことを考へてゐたでせうか？　彼はその危險に對して何等かの防衛手段を構じなかつたでせうか？』

勞働者はしばし思案した後に言ふた。

『多分防備をしてゐたことと思ひます。それ以前にはキリイム・イワアノウキッチには何等の危險も迫つてゐなかつたのですが、あの事件、即ち掴ち合ひのあつた以來と云ふもの、私には、くゞり戸は嚴重に締め、夜は必ず臺所に泊ることを命じました。そりやあ、當然のことでございます。何故と云ふに、ザアハル・イワアノウキッチと來ては無鐵砲で、暴れ者でしたからね！　その點はあの一家の遺傳なんです。あの掴合のとき若し彼から私共が鐵砲を取り上げなかつたら、

それこそ、一も二もなく彼は、其場で兄を殺したに相違ありません。』

次にその男よりも多少年下の勞働者は、兇行のある二日以前に、何者とも知れずキリイム・イワアノウヰッチに投石した事實を想ひ出した。勞働者達はそれが白痴の手業であると見込みをつけてゐたのである。即ち彼は自分を虐待する長兄を恨み、しかも自分にとつては唯一の庇護者である次兄のザアハルが放逐されて以來、自分の戀ひ慕つてゐるグラヒラが、長兄の爲めに拷問されるのを見たとき、長兄に對して骨髄に達するまでの怨恨を懷いてゐたと云ふことを彼等は知つてゐた。しかるにもかゝはらず當人のキリイム・イワアノウヰッチの考へは全く別なものであつた。ときに彼は顔を曇らし、やけに、亂暴に往來に飛び出し、あたりに人のゐないと知つたとき『ザアハル奴の仕事だ！』と顔を暗くして一人つぶやくのであつた。

それ以來と云ふもの夕方になると彼は顔を曇らせ、一寸した物音に對しても氣

を配るのであつた。

『全く狩り出された狼のやうだつた』とその勞働者は云つた。

こうした方法によつて兎に角、辯護士は二つの事實を推定することに成功した。その第一はキリイム・イワアノウヰッチは絶えず、弟の襲擊に氣をつかつてゐたと云ふこと、第二は發砲を耳にした全部のものが、等しく、直ちに、それがザアハルの仕業であると直覺してしまつたと云ふことであつた。

證人に對する訊問は悉く終つて休憩となり、さて愈々双方側の辯論戰に這入つた。

十二

『陪審官諸君！』檢事の論告は開始された。

『我々の前には恐るべき、しかも、噫！　それは露西亞人にとつては餘りに常習であるところの、恐るべき事件が提示されたのである。吾が國民は無智である。野蠻である。露西亞文學は彼等を理想化し、彼等に對して神を懷ける國民であり、神を求めつゝある國民であるとの名稱を與へゐる。しかしながらこゝに、その後者の言は、最下等の野蠻人と雖も何等かの意味に於て神を求むることが、人間の本性であるとの範範内に於て、假りに正當なりとして許せるとしても、前

者の言は、露西亞國民の過去に於ても、現在に於ても、それは何等の證據立て得る實例がないのである。全露西亞史を通じて、それは餘りに無意味な、そして無情な動亂であり、慘酷なる征服であり、慘虐なる皇帝、修道院的狂信者の歴史であつた――。私から見れば、露西亞國民は、寧ろ非宗教的であり、彼等の捧持してゐるのは、單にそれは迷信に過ぎないのである。彼等が表面信仰してるが如く見へる宗教に就ても、彼等は、その本質に就て何等理解ある譯でなく、また無關心である。彼等は常に「キリストは苦しみたまへり。我等にもそのことを敎へたまへり」と口にしてゐることは事實である。しかしキリストの人格と、その高遠なる敎義とは、何等彼等に理解されてゐない。彼等が頑迷に盲信してゐるのは寧ろ十月十四日の祭、祟り目、遺骨、燈明等、總てそうしたたぐひのもので、一言にして云ふなれば、彼等は宗教の眞髓よりも、その偶像方面により強い信仰を持つてゐるのである。ある天才的露西亞畫家によつて、敎會で「アーンテエ、イ、ド

ンドンヂャーヂユ」(念佛)を聞きながら、哭き入つてゐる露西亞女が畫かれてゐる。それは、とりもなほさず、彼女が宗教に就て何にも理解を持たないと云ふことを示したものに他ならないのである。吾々は、殆んど許すべからざる輕薄さを持ち、國民的正義を目的としてゐるかの如く見える政治學徒や政黨が、勝利を占めるそれ以前に、それに手後れにならない以前に於て、吾が國民には、期待すべき何等特別なものゝないと云ふこと、そして、吾が國民が如何に野蠻的であり、その數百年の間如何に朦昧であり、常に、無政府的な自由、掠奪と暴行の自由を空想してゐた單純な蠻族的な遊牧民であつたと云ふことを自覺せしめねばならない。吾々は、或は近い將來に於て、掠奪が公々然となり、あらゆる蠻風が巷に競ひ、流血は天にも迸り、歐州、並に全世界の文明に、戰慄と驚駭とを招徠する時代の來るのを豫想することが出來るのである。

そうだ！　吾々露西亞人は野蠻である。——掠奪、暴行、我儘勝手、殺人者であり、大馬鹿者である。これこそ吾が國民の傳統的生活を卒直に表現した言葉である。綠の蛇と赤い雄鷄(譯者註、亂醉と火事)は我々の家蓄である。(我々ロシア人の生活にはなくてはならない)吾々野蠻人はその面相に於て、その精神に於て、未だなほ、亞細亞人的痕跡から脫却してゐない。卽ち、その頰骨の大にして突起してゐる點に於て、その細眼にして、慾情の猛烈にして制禦を知らない點に於て、然りである。

戀する以上は、盲目的に
嚇す以上は、冗談半分でやるな。
罵る以上は、邁までも
毒を食はば、皿までだ。

とは、吾が露西亞詩人のみの、かゝる情景を寫して叫び得る言葉である。

まことに、吾々露西亞國民は節度と云ふものにかけては、全くの無智である。

吾が國民の宗教心と云ふものは、繰り返して云ふ、固陋な迷信によつて鑄固められたものであり、その觀念は幻想と獨斷である。政爭は常に流血の恐怖と、慘酷なる獨裁の表示である。その理想は無政府的の自由である。

吾が國民の文學――それは尠くとも傲慢なる豫言的のものであり、且つ、それは、我と我が身を鞭打するものである。吾が國民の民謠――それは野蠻極まるものでなければ、低級な、ジプシイ的淫蕩なものである。吾が國民の英雄――それは、スチニカ、ラヂヌイ、プガチエフ、さもなくば、一片の堅パンで命をつないだと云ふ、あの乾からびた老人セラヒモフである。吾が國民の娯樂――それは酒に狂醉することである。吾が國民の戀――それは、自己犧牲と拷問である。一度熱情の發作するや、吾が國民はあらゆるものを破壞し、總てを汚穢の中に蹂躙するのである。名譽も、家族も、自分自身までも、泥土の中に踏みつけてしまふのである。吾が國の娘どもは、決して純潔であると云ふことが出來ない。婦人は貞

節ではない。彼女等は墮落し、放埒である。それは彼女等が何ものをも惜まず、何ものをも、尊重しない爲めである。不幸な戀に泣く女共は、修道院に集り、呪はれたる戀に惱む男達は、自から額に彈丸を射込むか、乃至は、ナイフを握ると云ふ有樣である。これを一言にして云ふならば、吾が國民の總ては、無分別であり、放埒であり、道樂者であり、遊蕩兒であり、ノラクラ者であり、酒飲みである。最上の教養のある階級と雖も、この亂醉の點に至つては、最下級のものから一歩も出てゐない。あの高麗な「ヤアラ」の館から、最下級な「居酒屋」までを數へると、全露西亞は、酒場を以て滿ちてゐるのである。若しも吾が新兵の一隊が名譽ある行進の途中、奮然立つて、酒場を木破微塵に打ち壞し、亦學生達が教育紀念日に「Gaudeamus」を高唱して、遊廊を叩き毀し得る場合があるとするならば――假令一時的にもせよ、その精神だけは望ましいのである――かくの如きは我が國民が無賴漢であり、墮落民であり、破壞以外何一つ爲し得ない無能力者